
俺の姉妹達の憂鬱

2次元美少女っしょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の姉妹達の憂鬱

【Zコード】

Z0458S

【作者名】

2次元美少女っしょ

【あらすじ】

勇一とあらゆる女の子と出会い

けして俺の妹がこんなに可愛いわけがない ではないがオリジナル作品でいろんなアニメ作品がヒロイン等で出できます

勇一は1年前 1年の時にどんなキャラでも一度は会つてるとこ
設定で

僕が見ている／見ていたアニメをこの作品に入れていく予定です
現在のアニメ けいおん！・とある魔術&#amp;科学・オーバー

ラン・俺の妹・IS

バカテス・生徒会の一存・えむえむつー・まよちき・まどかマギカ・
猫神やおひるず・AB・オオカミさん・など

今期導入アニメ C3シーキューブ・ベン・トーなど

俺の日常？（前書き）

注意 あらし 悪口等は禁止です

話の中にはいろんなアニメ作品がでますから

俺の日常?

「俺の姉妹達の憂鬱」

爽やか朝の日差し、雀達が鳴く青天の霹靂
とある1件の家で…

ドンドンと2階へと上がる足音、そして部屋へと入りベッドで寝て
いる主人公を起こそうとした。

？？「朝だよ！今まで寝ているの」

そう俺の家には姉がいた。しかも美人

勇一「うーん 朝は眠いのが当たり前だな……」

？？「もうそんなこと言わず、早く起きない！遅刻するわよ」

勇一「わかったよ、さっさと着替えるよ涙子」

涙子「うむ、よろしい」

おっと自己紹介が遅れたな

俺の名前は天川勇一

この家に住む住人、いたつて普通の高校生、健全だからアニメやグ
ッズだつて多少は持つてる

そして起こして来たのは天川涙子、俺達姉弟の一人、とっても面倒
がよく親に代わって家事やら掃除やらしてくれる

涙子は俺が制服に着替えるため部屋を出て下に行つた。俺は制服に
着替えカバンと今日の準備を早急にした。そして準備が出来たから
朝ご飯を食べるべく1階へ降りた。

？？「あーお兄ちゃんおはよう」

勇一「おはよう」

俺はリビングで年下の妹と会つた。その子は天川梓、俺の妹だ。髪
はツインテールでしかもかなり可愛い

梓「お兄ちゃん、今日の放課後用事ない？」

勇一「放課後？ そうだな～ないかもしねないが、それがどうした？」

梓「それは、後でのお楽しみ」

なんだろ 後で話すなら今言えればいいのに

するとリビングのドアから黄髪の女の子が入つて來た。

？？「涙子ねえ、梓 おはよっ」

涙子「おはよう桐乃ちゃん」

梓「おはよう お姉ちゃん」

勇一「おはよう 桐乃」

桐乃「…………、気安く話かけんなバカ！」

勇一「うつ！」

桐乃はなぜか俺にだけきつて言つ

そう今天川家全員集まつた。ここで改めて言つておく

俺の家族は1番の姉 学年は3年の涙子 2番目の姉 桐乃、桐乃
と俺は同じ年で学年はこれもまた同じ2年同士、そして1番下の妹
梓 学年は1年で俺達の後輩、そんで親なんだけど親は不明、親
についてはまたの機会に……

こうして朝食を食べ、学校に向かつた。

（学校の教室）

勇一「はあ～」

？？「どうした？ため息なんかして」

勇一「ああ 枯渴か、なんかイベント起きないかな～って思つてた
んだよ」

枯渴「イベントなんてアニメの話だけだろ！」

そう今話をしているのは俺ダチ本名は唐谷枯渴、まあ似たもん同士
つていうことで……

それから朝の授業を受け、昼飯を食い、午後の授業も受け ついに
放課後

惜しくも雨が降つていた

勇一「あ！ そだ梓にメール 打つてお～」

枯渴「おいおい勇一、雨が降つてるぜ まあ俺は置き傘があるけど
どうする？」

勇一「いいよ 先に帰つて 俺、用があるから残るよ

枯渴「そうか それじゃ」

勇一「また明日」

そう言つて俺と枯渴は学校で別れた。ちょうど梓からのメールが来た。内容は

梓（「お兄ちゃん 今から手伝つて欲しいから1階の1年4組に来てね PS: 遅れたらまじ殺す!!!」）

勇一「げー! 殺すつて…」

でもまだ続きがあった。

梓（「さつきの殺すは脅しだから勘違いしないでね」）

勇一「まつたく梓は」

俺は携帯を閉じてポケットに入れ待ち合わせの場所へ行つた。5分後、親は梓に言われた通り1年4組に着き梓と会つた。

勇一「梓、それで俺になんか用?」

梓「ふふんつ、実はね」

梓に呼ばれた理由は先生の書類プリント1メートル分の厚さを自達のクラスの教卓に持つて行くことになつた。

勇一「呼ばれた理由は持ち運びかよ!」

梓「ごめんね お兄ちゃん、私だけじゃ全部持つて行くことは出来ないから」

勇一「たくつ しようがないな…………なあ梓」

俺は書類プリントを持ったまま梓に話かけた。

梓「何? お兄ちゃん?」

勇一「帰り一緒に帰らない?」

梓「うん、いいよ」

勇一「あと傘 入れてくれない? 俺傘持つてきてないんだ」

梓「わかった しようがないお兄ちゃんのために入れてあげるよ」

俺は一安心した。梓の傘の中さえいれば全身濡れずに帰ることが出来る

勇一「悪いな、梓」

俺と梓は書類プリントを教卓に置いて荷物を持ち、下駄箱に着き外

靴に履き替えた。だがやっぱり雨は降ってる。梓も前に置いていた置き傘を手に取つて傘を開き、傘を俺に渡し一緒に帰つた。なんか相合い傘だな

雨の中俺と梓は面白い話や昨日のことなど帰りながら話した。15分後ようやく家についた。びしょびしょにはならずに済んだけど足元や肩半分（俺の場合、左 梓は右）がちょっと濡れた。

勇一「ただいま

梓「ただいま」

涙子「おかえりー！」

涙子はいつもテンション高かつた。まあいつものことだけど、傘を傘立てに入れ家に入つた。玄関を見てみると桐乃の靴があつた。といふことはもう桐乃が帰つてることになる。

涙子「外大変だつたね大丈夫？」

勇一「まあなんとか」

梓「これぐらいならドライヤーで乾くよ 私服 着替えてくる」

勇一「じゃ俺はシャワー浴びてくる」

靴を脱ぎ俺と梓は別々に別れた。俺は浴室のドア持ち開いた。

そこにはなんと裸でタオルで頭を拭いている状態で俺の目の前にいて目があつた。その子は紫髪にネコミミなんだけどその形がまじね

「ミミそつくりの地毛

？？「おかえりなさい」

勇一「おっ！あゝた、ただいま」

俺の心は死んだ。それは目の前に有り得ない状態だから冷静でいた。

すると廊下からこちらに向かう足音が聞こえた。それは桐乃である桐乃「ねえ希 服のことなんだけど……………！ちょっと何してんの！」

勇一「な…何つて何もしてないよ

桐乃「……………この変態が…！」

勇一「ぐうう……………！」

俺はなぜか桐乃に殴られるハメになつた。

なぜ桐乃に殴られるのかなぜ俺の家に女の子がいるのか果たしてその理由は……続く

俺の日常？（後書き）

面白くいただけたでしょうか？
もしよろしければ小説募集の方をお願いします
まだ新人ですけどよろしく

迷い猫? いや～（前書き）

前回の続きをです

また1作品出しました。

迷い猫オーバーランとオオカミちゃんと七の仲間たち
まだまだ作品出しますのでよろしくお願いします

迷い猫？にゃ～

「俺の姉妹達の憂鬱」

第2話

天川家食卓、イスが余らない人数でいた。向かいから順に言うと女の子、桐乃、涙子、梓、俺という席でいた。そして前回の続きだが……天川家になぜか女の子がいる。その様子から物語は始まる。

勇一「で！ なんでうちに女の子がいるの！？」

俺の激怒の質問に桐乃が答えた。

桐乃「それは、私が連れて来たから」

連れて来ただと！ …… 犬や猫じゃあるまい

涙子「連れて來たってどうこと？」

梓「何か理由でもあるの？」

桐乃は少し暗い表情で話した。

桐乃「実は…… さつき公園でこの子が雨の中すーーーと雨に打たれてたから可哀想で…… 連れて来ちゃった」

涙子「なるほど、桐乃ちゃんは人思いだね」

桐乃「だって可哀想だと思わない！？ 雨の中すーーーと一人ぼっちみたいだから見てらんなくて、あとこれギャルグーみたいし

勇一「ギャルグーかどうか知らないけど、桐乃は優しいんだね」

桐乃「うつさい！ 気安く優しくすんな！」

俺は桐乃が言ったこと返事せず聞き通した。

梓「それで名前は何？」

桐乃「そう言えば聞いてなかつた。名前は？」

？？「希、にゃ～」

勇一「にゃ～？」

梓「え！ 猫なの！？」

涙子「2人共、驚くとこじやないし、…… つて名前だけ？ 名字はないの？」

希「名字、わからない」

勇一「わからないってずーっと一人で生きて来たの?」

希「うん、」

ここまで一人で生きてきたなんてびっくりしてたんだろ……など俺はちょっと不思議に思つた。

梓「でも希ちゃんどうするの?、もしかして引き取るんじゃ?」

桐乃「当たり前でしょ!、希ちゃんを追い出すわけにはいかない!、

私が面倒みるから涙ねえお願い!」

桐乃是必死で希のことをかばつて言つた。俺はこんなに必死の桐乃を見るのは初めてだ。

涙子「桐乃ちゃん、私じゃなくて私達でしょ!、」

桐乃「え!、じや!、」

涙子「希ちゃんは私達と一緒に暮らすんだよ、希ちゃんはそれでいい?」

俺もふつと希の方に向いた。希の顔から笑顔が見えた。もしかして希は初めて笑顔になつたんじゃないかと思つてちよつとびっくりしたけどよかつたと思つ。

希「うん、別に構わない」

ということで希が天川家に入つたことで毎日の日常がより楽しくなりそう……と俺は思つた。

涙子「そうと決まればさく食事にしましょ!」

長い話しが続いたがまだ食事を食べてなかつたから今からテーブルに置いてある涙子が作った料理を俺、梓、希が食べ始めた。希の分は代わりに桐乃分をあげ、新たに自分の分を桐乃と涙子が作った。

そして食卓に楽しい会話が弾み時間が過ぎて就寝の時間、2階にて俺は自分の部屋で寝るのだが、ちょうど桐乃がいたから忘れた疑問を問いかけた。

勇一「なあ桐乃……」

桐乃「何?」

勇一「あの時、なんで殴つたんだよ」

桐乃「あの時？」

勇一「ほら、浴室で」

桐乃「あ～あれね、そりやあんだが希ちゃんのは……裸を……みたから、罰を受けるのは当然……だから……そんだけ」

そして桐乃是自分の部屋に入つてドアが閉まつた。

まあ そ う だ よ な～ 自 分 で も 悪 い こ と は わ か つ て い る ん だ け ど

勇一「仕方ない、寝るか」

俺はそのまま部屋に入り、何もせずにベッドに寝て今日とこいつ日を過ごした。

ちなみに希は桐乃と一緒に部屋で寝たそだ。

翌日、俺はいつものように朝を起き制服に着替え食卓へ向かつた。

勇一「おはよ～」

食卓に集まつているのは涙子、桐乃、梓、希がいた。やはり俺は起きるのが遅いのか～みんな早いな、

涙子「勇一、おはよ～」

梓「お兄ちゃんおはよ～」

桐乃「おはよ～」

希「おはよ～」

やつぱり桐乃是俺に対する態度が違うんですけど…

勇一「ねえ姉貴、希はどうするの？」

俺は希のことをどうするのか涙子に聞いた。

涙子「ふふん それは女の秘密よ」

世の中、女の秘密は気になる。

涙子「梓ちゃんと勇一は先に行つて、後で私と桐乃ちゃんは行くから」

勇一「ああ～わかつた」

俺と梓は先に朝食を食つていつもより早い時間に家を出た。

勇一「女の秘密って何だろ？」

梓「あ～秘密は秘密なんじょ

そう言つて梓は姉貴や桐乃とは関わりがないことになる。

そして俺と梓は校舎口で別れ、別学年に向かった。下駄箱で枯渴にあつた。

勇一「よう！枯渴」

枯渴「ん？あ！勇一 おはよう 今日はどうした？もしかして 口説きに口説けなかつたりして」

勇一「バーカ、そんなことしねーよ」

と1日の始まりの開始の定番だった。

階段を上がつて2年廊下……まだ枯渴と会話をしていると俺はふと殺氣を感じた。

枯渴「？どうした？」

なんだろ 俺はこの殺氣感じたことがある

俺はそう思つていたら後ろから俺に飛びついて來た。

勇一「！？」

？？「勇一様 ！」

勇一「もうやめろ乙姫！」

乙姫「いいじゃないですか」

この子は俺の幼なじみの竜宮乙姫、小さいころから仲がよく小3まで遊んでたんがその年、別の場所へ引っ越し乙姫とは別れることになつた。けど久しぶりに会つたのは高1の夏だけどその話しさはまた今度で……

枯渴「おいおい ラブラブになるのはいいが早く教室に行こうぜ！」

勇一「誰がラブラブだ！」

乙姫「いいじゃないですかラブラブで、私は勇一様が好きです」

勇一「お前は気が早すぎる！」

などとはしゃぎながらも一緒に教室に行つた。

先生「では転入生を紹介します」

先生が転入生のこと言つたら周りが騒ぎ出た。

先生「入つて来なさい」

先生に言われて入つてくる転入生、それは長い髪に薄紫色をしてて猫ミミのようで猫ミミじゃない形で可愛い女の子……

先生「天川 希君だ」希「にや〜」
俺はびっくりした。なんで希がいるのか その理由は次回に続く

迷い猫?にゃー（後書き）

どうでしょつか?

最近 テレビでいろんな作品が「リボ」としてこのひらくみますね
だから作ってみました。
感想をお待ちしています

美少女と振り回し（前書き）

どうもお待たせしました。

いや～考えて書くのって難しいです

今回は

えむえむっ！と

百花繚乱サムライガールズを入れてみました。

毎回毎回 面白いボケぐらいを頑張って書きます

美少女と振り回し

「俺の姉妹達の憂鬱」

第3話

そう とある近所の高校に希が転入して來た。俺は涙子や桐乃には聞かされてないから驚いた。なぜ転入して來たかといつとそれは昼飯の時、俺は希に話かけた。

勇一 「希がなんでこの学校に？」

希 「涙子や桐乃に入れもらつた」

勇一 「やつぱり」

俺の予想は当たつてた。まあ家に希を残すわけにはいかないからなあきつと今朝希を連れて校長に言つて手続きをしたに違いない

枯渴 「へえ希ちゃんか～、可愛いな」

希 「いや～」

勇一 「たくつ、……しづがない 希、これからもよろしく～」

枯渴 「俺もだ」

希 「よろしく」こうして俺と枯渴は学校で改めて希と交わした。希は初めて学校に来てから言うものすぐみんなとなつた。とともにかくにも希は午後からの授業をしつかり頑張つて受けっていた。そして放課後、

俺は乙姫と枯渴と希で帰る途中だつた。

教室を出てそしてわずか数20秒で階段に来て降り、1階まで降りる途中で俺は止まつた。俺が止まつたことで3人も止まつた。

枯渴 「どうした勇一？」

玄関に桐乃がいる……

勇一 「希、玄関に桐乃がいるから、桐乃と一緒に先に帰つてて」

希 「いいの？」

勇一 「いいつて いいつて」

希「わかつた」

希は俺達を置いて桐乃がいるところへ少し急いで行った。

枯渴「いいのか？ いかせて」

勇一「いいんだって」

乙姫「勇一様、優しいんですね」

勇一「ま、ま、な」

残つた俺達は再び玄関に向かつた。そして下駄箱廊下でとんでもない事件が起きた。

？？「このクソが ？」

俺は声がした方に向いた。だがそれは遅かつた、

その子の足が俺の顔に直撃し、さらに俺は反射の力で4メートル飛んだ。

勇一「ぐはあ つ！」

この力はハンパない！ 誰だよ！

壁まではいかなかつたけど廊下の床で倒れ俺は少しづつ頭を手で軽く押さえながら攻撃した人を見た。

勇一「いてて……たくつ！ 何すんだ！」

？？「はあ～？ あんたが帰るうとするから止めてやつたんじゃない」

「げつ！ 石動美緒！ なんでここに……」

彼女は石動美緒、学年は同じ2年だが組は別、しかも第2ボランティア部を作つているとか、あと石動美緒は暴言や暴行が非常に激しい、さらには石動美緒はドSで自信は気づかないとか、恐ろしい人だつて自分を「美緒様」って言つてんだよ！

でもでれる時が一番可愛いんだよね～でもその可愛さを利用することもあるんだよ

勇一「何！」

美緒「そんなことよりあんた協力しなさい！～」

勇一「協力？」

美緒「事情はあとで説明するわ、だから一緒にいくわよ」

勇一「え、え ！」

美緒は俺の手をつかみどこかに行こうとした。

あ！2人を置いちゃまずい……

勇一「枯渴と乙姫、先帰ってくれ」

枯渴「え！でも……」

乙姫「勇一様！」

俺は美緒に引きずられながら2人に言った。

勇一「俺は美緒に何か手伝うことになつていてるから……」

美緒「ほーらさつさと行くわよ」

勇一「あ～れ～」

俺は2人が遠くになつていきどこかに連れていかれた。

枯渴「…………仕方ない、乙姫 帰るぞ」

乙姫「わかりました」

ここ第2ボランティア部室

美緒「お待たせ！」

？？「美緒さん、お帰りなさい、？誰ですかその人？」

美緒「ふつふつふつ、とうとうブタ郎の治療者を連れて来たわ！」

勇一「え…………俺が治療者！」

美緒「嵐子、これでブタ郎のドMが治るわ…………つてそういうやあん

た名前は？」

はあ～やつと名前のことに入つたか

勇一「俺は天川勇一」

美緒「私は石動美緒でこつちが私の後輩の結野嵐子よ」

嵐子「よろしく

な～んだ2人共優しいそ～じやないか

しかし美緒は違つた。

美緒「じゃそういうことで覚悟はできるんでしょうね！？」

勇一「あの～美緒さん、なんで俺を襲う体制になつてているの～」

美緒「それはあなたの力が必要だからよ！～！」

勇一「うわ～！」

俺は美緒の構えをよけた。

美緒「なんでよけるの！」

勇一「そんな構えをしてたら誰だつて逃げるつて」

嵐子「ちょっと2人共、部室の中で走り回つたら危ないよ」

ひい～よくわからないけど美緒に捕まつたら何されるかわかつたもんじやない

俺と美緒は部室の中で走り回つた。交わしては逃げ、交わしては逃げとその繰り返し……と突然、俺は足をつまづいて嵐子に接触して倒れた。

勇一「いたたた……」

あれ？ なにやら柔らかくて暖かい何かが……

俺はそつと目を開けた。すると柔らかくて暖かい何かは嵐子の胸だつた。

勇一「…………」

嵐子は俺がきがづいた10秒後に起きた

嵐子「いたたた……？」

嵐子は自分の胸に勇一の顔があつた。

嵐子「きや…………」

勇一「う、つ！」

嵐子の悲鳴で逃げようとしたら嵐子の足が俺の顔を上に蹴り

嵐子「男の子怖いよ…………！」

勇一「ぐはあつ…………！」

俺は少し上へと浮き、その後嵐子の右手フックで俺の顔を殴り、そのまま逃亡した。

美緒「あ、嵐子！」

美緒は嵐子を追いかけた。

くそ……なんだよ、けど今がチャンス！

俺は部室を飛び出て走つた。

そして1分後、走りをやめた。

勇一「はあはあ、たくついたきなり殴りか……あれ? 急に視界が……」

俺は……目がぼやき……倒れた。

??「?、一大丈夫ですか!」

勇一「…………んんん、あれ?」

そういうえば俺廊下で倒れたはずじゃ……俺の横にいる人は……

??「あ!きがづいた!良かつた!」

俺は起き上がり横にいる女の子を見て話した。

勇一「君は?」

??「私は柳生 十兵衛 三蔵」

勇一「名前なが!」

十兵「だから十兵でいいよ

勇一「俺は天川勇一、なんか助けてもらつてありがとう」

十兵「いいつて いいつて、十兵は当たり前のことをしたまでだつて」

勇一「あれ? 先生は?」

十兵「あ~先生はさつき出てつたよ、」

勇一「そうか ありがとう」

今の状況を把握すると俺は十兵にたすけられたあげく保健室に来て寝ていたらしい。十兵のおかげで

勇一「さて 帰るとしますか」

十兵「え!まだ安定しないと……」

勇一「大丈夫だつて、この痛みなんかへっちゃらさ さつと帰らないといけないし

しつかし十兵の胸…………――――――大きな!

十兵「そつか じゃ一緒に帰ろう」

勇一「え!」

十兵「ね!」

さらに放課後、午後17時30分 僕は柳生 十兵衛 三蔵と一緒に帰っている、とゆうか優しい。

とある下校道

十兵「ねえ、勇一君はなんで廊下で倒れてたの？」

勇一「うーん、なんでだろう？ 思い出せない」

十兵「思い出せないなら、どこかで思い出せるよ」

勇一「そうかな？…………まついつか」

十兵「それじゃ勇一君、またね」

勇一「うん、それじゃ」

俺と十兵はそれぞれ左右反対の道で帰った。

翌日、俺はいつもより早く1人で学校に向かった。

そして学校に入り、廊下で自分の教室に向かおうとしたら後ろから

俺に声をかけてきた。

？？「ちょっとそここのあなた、」

俺は声をかけられた方に向きかけた。

そう、これから俺の人生はこの声とかけた人によって変わってしまうことに。 続く…………

美少女と振り回し（後書き）

どうですか？

面白かつたですか？

最近コラボ作品が多くなったから

やってみたくて

次回は俺の妹がこんなに可愛いわけがないポータブルのルート分岐風に始めます

ルート分岐は4・9話

つまり 9作品で4・9話を書きます

ルート開始時はパツと思いついた作品から始めます。

けいおん！ルート（前書き）

第4・1話から4・9話まで分岐ルート風に分けて書きます
今回は……

けいおん—ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・1話

俺の後ろに声をかけて来た女の子

？？「おい、そこのお前！」

俺は声をかけられた方に顔を向き、話しかけた。

よくみると女子なのに学ランボタンを全開にあけていて、カチューシャで前髪を止めてデコボコがみえてるし、なんか全体的にボーアイシュな感じ

勇一「何？何かよう？……！」

ボーアイシュな女の子は俺の方に近づいて来た。その女の子は……

つて近！……

？？「軽音部つてどーじー？」

勇一「え？……」

？？「あれ、聞こえなかつた？軽音部だよ軽音部！」

勇一「あ 軽音部ね、わかつた、案内するよ え つと名前は？」

？？「え？、あつーごめんごめん 私は田井中 律

勇一「俺は天川勇一」

俺は律に軽音部への行き先を教えるため向かった。

そして歩いては途中で階段を2回登り、3分後 軽音部の部室についた。といつても誰がやっているのか本当にやっているのかは全く知らないんだけど……

勇一「ここが軽音部だよ」

律「おおーサンキュー」

俺は念のため挨拶をすることにした。

勇一「おはよーいります」

？？「おはよー、つて君は誰？」

勇一「俺は勇一、律を軽音部に連れて来たんだけど……」

もう一人一人言うのはたいがいからまとめて紹介する

今話しているのが秋山澪、その隣が平沢唯、なぜかティーセットを持つこちらを見て微笑んでみるのが琴吹紬、みんな美人に見える

勇一「律、俺に感謝を……ってあれ？ 律は？」

俺は律を探した。しかしこにもいない、すると俺の耳元で

律「けいおんぶへようこそ、ウェルカム！」

唯「入部おめでとう！」

勇一「な、何！ 入部だと！」

俺は驚いた、まさか俺を入部させる罠だつたとは気づく」とすならなかつた。

紬「クツキー やお菓子もありますよ」

クツキー！ お菓子か…… ってお菓子等などで吊られる俺じゃない！

澪「こら律、強引に誘つたら迷惑だろ！」

なんだかよくわからないけど今離れた方がいいみたい

勇一「それじゃ俺、教室に戻るから、じや！」

澪「え！ ちょっと…」

俺は急いで部室を出て階段を降りようとしたら梓と会つた。

勇一「！ あ、梓！」

梓「！ お兄ちゃん！」

どうしよう、足が止まらない このままじゃ梓とぶつかってしまつ、こうなつたら

俺は次の右足を踏んでクイックターンで右側へと交わした。

これで梓にぶつかることはない…………と俺は確信をしたが、

梓「お兄ちゃん、そこ段差が」

勇一「え？」

段差？ しまつた右足の踏み場がない！ このままだと……

俺の右足は踏み場の段差が低いため態勢のバランスが崩れ、転んだ。そして俺は気絶した。

あれ、前にも似たような…………

梓「お兄ちゃん!!」

気が付くと俺はまた保健室にいた。よくみると俺の周りに何を見覚えがある人達がいた。

澪「良かった、目が覚めて」

律「心配したんだぞ」

勇一「あれ? 俺なんで保健室に」

唯「勇一君、階段から落ちたんだよ!..」

紬「それでみんなで保健室に連れてきたんだけど」「どうやら俺が気絶している間保健室に運んだらしい……」

梓「もうお兄ちゃんのバカ!」

勇一「ごめん……今何時?」「

梓「何時つてもう一時30分過ぎだよ」

勇一「え!」「

まじか! じゃ今こる梓達は今休憩中つて! とこうよう昼飯じやん!

勇一「やっぱーみんなに誤つて行かないと」「

澪「おいおい、そんな体で大丈夫か?」「

勇一「心配してくれてありがとう、ナゼやすんていられる場合じやないから 唯、澪、律、紬それから梓 看病ありがとうね」

俺はベッドから降りそのまま保健室からでて自分の教室へまず向かつた。

律「たくつ勇一は!」

澪「そもそも律、お前が始まつたことだらうが

紬「まあまあ澪ちゃん」

唯「おちけつだよ澪ちゃん」

俺は教室に行きクラスメイトと枯渴達に挨拶的に言つてたり先生にも言つて枯渴と乙姫と希でよしきよく一緒に昼飯が食えた。

希「勇一大丈夫？」

勇一「大丈夫 大丈夫」

乙姫「朝からいなかつたから心配でしたのよ」

勇一「ごめんごめんつて」

枯渴「たくつ、お前がいないと面白くないんだつて」

勇一「はいはい 次からは俺が気をつければいいんだが」

などいつものように話しをしていた。

そして昼からはいつものように午後の授業を受け下校にはいつものようにはみんなと帰つて家に帰宅した。

今日は本当 疲れた♪ 翌日、今日は土曜日

俺は朝から勉強をしていた。すると

梓「お兄ちゃん、何しているの？」

勇一「勉強だよ」

梓「じゃ今日は私に付き合つて」

勇一「ぶ つ！ つ！ 付き合つ！ ？」

梓「お兄ちゃん、勘違いしてるかもしれないけど、デートじゃないから」

勇一「え？」

デートとじゃない！？ じゃ他つこと？

梓「付いてきて」

俺は梓と一緒に外へ出た。

そして梓はいきなりのことを言つた。

梓「お兄ちゃん、腕組んでいい？」

勇一「え！」

梓「だめかな？」

なんで下から目線！ やめろ！ ねだる攻撃は！

勇一「だめじやないけど」

梓「良かつた、えいつ」

勇一「梓！」

梓「それじゃ行こう」

俺は頬を赤くして照れていた。今まで女の子と腕組んだことがないのに梓は気にせず組んだ。そして梓が行く行き先は梓がよく行く近所のスーパー

勇一「なんだよ付き合いつつてスーパーかよ」

俺はちょっとがっかりした。てっきり遊び系かと思ったが

梓「何そのがつかりとした態度は!」

勇一「別に」

梓「それよりこのスーパーで2000円以上買うとクジ券1回分出来るんだって」

勇一「へえ」

梓「へえ~じゃない、さあ行こう

勇一「ちょっと梓」

俺の手は梓の手で引っ張られた。なんか恋人関係的な感じそれから梓の買い物(夕飯の買い出し)を30分くらいした。梓の言つとおり2000円以上買つたら本当にクジ券が付いてきた。俺と梓はさつそく小さい抽選会場へ行つた。

勇一「これお願ひします」

店員「はい、1回分ですね どうぞ」

梓「お兄ちゃん 回してみて」

俺は梓の言つままガラガラを回した。その結果が

出た 青玉!

店員「おめでとうございます。第2回抽選券5回分を差し上げます
そして帰宅途中

勇一「第2回田もあるんだ~」

梓「良かつたじゃない、商品は手に入れることは出来なかつたけど
まだ次がある

勇一「そうかい」

結局1位の商品「豪華i-fロシアレストラン食事券1組無料券」は当たることはなかつた。あたれば枯渴達も誘えたのにな
梓「今日はありがとうね、」

勇一「別に、礼を言われる程でもないよ」

梓「なんか無理やり付き合わせちゃって」

勇一「そんなことないさ 梓のためなら何でも付き合ってやるぜ」

なんか梓顔が火照ってる

梓「ありがとう お兄ちゃん」

俺と梓は買い物袋を持ちながら家へと帰った

こうして俺と梓の関係は新たに1歩進んだ

けいおん！ルート

END

けいおん！ルート（後書き）

どうでした？

うまくけいおんルートとして書きましたが
問題もありましたでしょうか？

今回はけいおん！メインメンバーと妹梓と一日でした
次は4・2話で会いましょう

俺の妹ルート 4・2話（前書き）

今回はこのストーリー分岐の原作である俺の妹編
です

俺の妹ルート 4・2話

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・2話

俺に声をかけた女の子は

？？「ちょっととそこのあなた！」

俺は振り向いた、よくみると…………あれ？ 帯をみたら一年

勇一「なんですか？」

？？「この私をみて「なんですか」

とはよく言つたもんだわ」

勇一「え？」

な……何！この子ちょっと生意氣だな

？？「私の名は五更瑠璃 ハンドルネーム 黒猫よ

勇一「黒猫！」

黒猫「その反応だと ようやく思い出したよね」

そう俺と黒猫は2ヶ月前に1度会つていた。それはゲーム大会決勝でのこと、その相手が黒猫だった。黒猫の実力は予想以上だった、だが俺もなんとか互角にわたりあえた。

しかし黒猫は強かった。俺があとちょっととのことで黒猫は「形勢逆転」という言葉通りになり優勝したあの黒猫。

勇一「その……黒猫が俺に何か？」

黒猫「あなたゴッドイータバースト持つてる？」

黒猫は俺に話しかけながら歩いて来た。

勇一「ゴッドイータバースト？ああ、持つてるけど それがなにか

？」

黒猫「今度 ゴッドイータバーストチーム大会のネット杯があるの

勇一「へえ、もしかして俺もやれと？」

黒猫「そうよ、ってあなた ピッチには聞かされないのかしら？」

勇一「ピッチって誰？」

黒猫「桐乃ちゃんのことよ」

黒猫と桐乃の関係つてなんなの！」

勇一「そうですか」桐乃からは聞かされてないけど

黒猫「あら可哀想に、でも明日ピッチの方に行くから伝えてちょうだい」

そう言つて黒猫は俺を通り過ぎて階段で下りた。

時が過ぎてもう17時、俺はソファーでゲームしている桐乃に黒猫の伝言を行つた。すると桐乃が

桐乃「ちょっと部屋まで来て」

と自分の部屋へと戻るから俺は不思議思いながら付いて行つた。

桐乃の部屋は普通の女の子の部屋、たいして変わつたところはない

桐乃「ねえ ちょっとといい？」

勇一「な、何だよ」

桐乃「じ、人生相談があるの」

勇一「人生相談！、一体なんだよ！」

びっくりまさか桐乃が俺に悩みを話すなんて

桐乃「あんた 私と一緒に出なさい」

言うと思つた。黒猫から少しだけ似たような言葉だった。

勇一「ああ いいよ ちょうど時間は空いてるし」

桐乃「あら 意外に聴いてくれるのね」

勇一「意外は余計だ」

桐乃「けどありがとう」

桐乃が初めて俺に礼を言つた。しかも可愛い……

桐乃「あともう1つ人生相談がある」

勇一「まだあるのかよ」

桐乃「実はあんただけ私の秘密を教えてあげる

勇一「秘密？」

そう言つて桐乃は裸に手をとり戸を開けた。その中は……大量

の妹ゲームやファイギュアなどが収まつていた

勇一「おま……お前！」

桐乃「今まで隠して来たんだ……」

勇一「お前！まさか梓を！何するきだ！」

桐乃「声が大きい！あと勘違いだから！何もしないわよ！」

勇一「はっ！ごめん つい……」

妹ゲームなどあるからてっきりそうゆうのかと

桐乃「だから…このことは内緒にしてほしいから…お願い！」

桐乃が珍しく俺に頼むことはないからここは受け止めよう

勇一「わかった、桐乃の秘密は誰にも言わない、何かあれば言つてくれ 出来る範囲ならやつてやる」

桐乃「あ…ありがとう」

桐乃、もっと素直になつてもいいと思うのだけれど……

桐乃「じゃ さつそくゴッドイータバーストの特訓するわよ」

勇一「え？ 今から？」

桐乃「そう 今から！あんたに拒否権ないから

前言撤回…やつぱり桐乃を可愛いくは見えない
結局俺と桐乃是晩御飯まで特訓し、そして晩御飯を食べ終えてまた
特訓と、夜中まで付き合わされた。

そして翌日、俺は学校でぐつたりしてた。

枯渴「どうした？ 勇一、気味悪いぞ」

希「昨日 桐乃と勇一は夜中までゲームしてた」

枯渴「ゲーム？たくつお前は！やりすぎにもほどがある」

勇一「仕方がないだろ あの桐乃が俺に頼んできたんだから」

本当めつたにない桐乃が頼んできたんだ、断つたら一生ないんだから……

乙姫「勇一様は桐乃さんに優しいんですね」

勇一「けつほつとけ！」

そして放課後、俺はいつも通り帰りこのあと黒猫とゴッドイータバーストの特訓をするため家に着き少し着替えと準備をした。そういうえば玄関に見覚えがない靴があつたな（じや先に桐乃の相手をしているのか、でも誰？

俺は疑問を思いつつ準備を続けると黒猫が天川家に来た。

黒猫「お邪魔するわ」

勇一「おう、黒猫 上がって上がって桐乃待ってるから」

黒猫「あら、私の知らないお友達が来てるようね」

勇一「そうみたい」

黒猫を玄関で迎えた後、桐乃の部屋へと案内をした。そして桐乃の部屋に入ると、本当に俺と黒猫が知らない人とゲーム（ゴッドイータ）をしていた。

桐乃「あつ！……遅い！いつまで待たせるつもりだ！」

勇一「俺はついさっき帰ったばかりだし、黒猫は今来たばかりだしそこまで時間は経つてない！」

黒猫「本当あなたは言い訳女かしら～」

桐乃「なんだと！」

勇一「そんなことよりそこの青髪の女の子は誰？」

桐乃「ん？あ～こなちゃんのことね、こなちゃんはネットで知り合つたんだ」

こなた「泉こなたです。よろしく」

勇一「俺は天川勇一」

黒猫「黒猫でいいわ」

こなた「黒猫～ほほ～はい、にや～」

黒猫「なんの真似？」

こなた「いやいや 黒い猫だからにや～って」

黒猫「あなた私をからかっているのかしり」

やべー 黒猫の怒りが……

勇一「と…と…とりあえずゴッドイータの特訓しよ こなたさんは強い方？」

こなた「強いも何もシングルは9割、タッグは7割程度だけ」やべー結構な上級者！

こうして今日の特訓は俺と桐乃対こなた黒猫でタッグバトルの特訓をした。こんな特訓の日が2週間続いて……3週間目の初めその日

は「ゴッドイータバーストタッグ戦ネット杯、場所は

もちろん桐乃の部屋、それは桐乃のパソコンはWi-Fiになつてゲーム等がインターネットを使えるようにしているから、

今部屋に入るのは桐乃、俺、黒猫、沙織

沙織は急遽呼んだ。こなたも一緒にやろうと桐乃が誘つたが用事があり参加出来ないから沙織を

まあネット杯はネットを通じていろんなコーディネーターと戦うので移動せず家でやることが出来る。

公式はトーナメント

俺と桐乃チームは3回戦まで勝ち進んだ。だが準決勝のあたりが黒猫＆沙織チームとあたり見事完敗した。その後俺と桐乃は2人を応援した。そして黒猫＆沙織チームが優勝し、大会の責任者から超限定の装備品とオリジナルクエストとレアアイテムをもらつた。

大会が終わり、黒猫と沙織は帰ることにした。

沙織「それではキリリン氏、勇一氏それではまた」

黒猫「ふつあなたの力も落ちたもんね」

2人はそのまま家を出て帰つた。

桐乃「きい！ 何なのあの黒いの！ マジ腹立つんですけど！」

勇一「まあまあ、終わつたことだからまた頑張ればいいよ」

桐乃「あんたのせいでレアアイテムゲット出来なかつたじゃん！ このバカ！」

そう言つて桐乃は再び自分の部屋へと戻つた。

勇一「はあ、本当になんか疲れるな～」

もういやになつちゃうくらいだ。ホント桐乃は俺に冷たいな

勇一「あ！ 買い出し頼まれてるの忘れてた」

ついつい遊びに夢中になり夕方になつてしまつた。俺は急いで財布と袋を持つて近所のスーパーへ行つた。今日はいろんな食材が割引していく安く買えた。レジ員から

店員「はい、くじ引き券です」

俺は店員からくじ引き券をもらい、すぐそこの中華会場でくじ引き

をした。ガラガラを回し出た。結果は

店員「おめでとうございます第2回抽選券ナンバーが当たりました。

」

勇一「はあ～」

店員「はい、どうぞ 次回の時に使いますので取つておいて下さい
ね」

俺がもらつたのは ナンバー218 ナンバーカードを買い出し袋
と一緒に入れた。

勇一「さ～てと、今晩は手伝おつかな～」

今日までいろいろなことがあつたからな～たまには良い～」としても罰
は当たらないだろ

俺は買い出し袋を持つたまま家へと帰つた…………END

俺の妹ルート 4・2話（後書き）

どうだったでしょうか？

こなたはゲームつながりでださせてました。

中々黒猫の毒舌は難しいですね

次回は とある科学ルートです

ひめの科学ルート（前書き）

俺の姉妹達

4・3話開始

今回はとある科学ルートです ちょっと省略しているところがあり
ますが気にせず読んで下さい

じめる科学ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・3話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

？？「あの～すみません、」

勇一「はい、」

俺は振り向くとそこには……

勇一「あ！初春じゃないか！？」

初春「お久しぶりです。勇一君」

実は俺と初春（残りの2人を含めて3人）は去年からの女子友達である。いつもは涙子も入れて5人でいろんな場所に行ったりなどとしていた。

勇一「ホント久々だな、それで俺になんの用？」

初春「実はですね、明日御坂さんと白井さんに会うんですけど勇一君もどうですか？」

勇一「え？来てもいいの？」

初春「はい！御坂さんや白井さんもきっと喜びます」

勇一「そうか～俺も会うのは久々だもんな～、ありがとうございます初春」

初春「どういたしまして、それじゃ御坂さんと白井さんに伝えておきますね。詳細は夕方改めてメールしておきますから、あとサテンさんにもメールします。」

勇一「うん、ありがとうございます。」

初春「いえいえ、それでは勇一君、また……」

勇一「おう」

初春は会話後、初春は階段がある方に行つて姿を消した。そして自分教室についた。

勇一「おはようっス」

枯渴「お ッス」

乙姫「おはようございます」

希「おはよう」

と、いつも学校でよく会う枯渴と乙姫、俺がついた時間は午前8時5分だった。

枯渴「今日はどうした？少し遅かつたけど」

勇一「ん？あー、ちょっと女子友で」

枯渴「何？」

乙姫「勇一様！どうゆうこと？」

あれ？なんで枯渴と乙姫が怒っているのかな？」

勇一「ど、どうしたの2人共、」

枯渴「どうしたもこうしたもない！なんでお前が他の女子と仲良くしてんだよ！」

乙姫「勇一様はわたくしより他の女を取りますの！」

勇一「ちょっと待て！！乙姫、お前は勘違いでそうは言つてない、あと枯渴！これはただの友達去年お前が知らないところで知り合つたんだ。」

枯渴「くつ～～なんでお前ばかり」

乙姫「勇一様！私のことどう思つているのです！？」

もう枯渴はなんかおかしいこと言つてゐるし、乙姫は…………もうなんだか面倒くさいなつてきた

勇一「乙姫！俺は幼なじみとして好きだけ、異性としてはまだわからん、でも普通に好きだ」

俺が言つた瞬間、教室にいるみんながざわめき声を止め、こつちを見た

勇一「！！！」、こつち見るな！」

先生「お前等 席につけ～」

ナイスタイミングのところでみんな席についた。そしてまたいつもと変わらない放課後までの半日……

放課後の時、

枯渴「勇一 緒帰る？」

乙姫「勇一様 帰りましょう」

勇一「おう わかつた、希も帰ろう」

希「うん」

俺は立ち上がった瞬間、ポケットから携帯バイブが震え俺はバイブを止め携帯からのメールを見た。

あ！……初春からだ！ 内容は……

初春「先ほどはありがとうございましたと固いですよね、それで日程についてなんですけど明日の13時に大広場公園の杉の木下で待っています。あと御坂さんと白井さんも来ますので……」

「それでは」

とのメール内容、初春のやつ

枯渴「勇一 何してんだ！」

乙姫「早く帰りましょう」

勇一「おう すまんすまん」

俺は2人から見つからぬようにポケットに戻し4人で帰宅することにした。

帰宅後、俺は涙子に初春の誘いのことを話していた。

勇一「ねえ涙子」

涙子「何かな？勇一」

勇一「初春からメールは来た？」

涙子「ああ、初春ね うん来たよ それが何か？」

勇一「ううん、別に」

ですよね～やつぱみんなで集まるんだしそうだよね

翌日、俺は昨日の初春からのメール通りの場所へ向かった。しかし

涙子とは一緒に来れない。それは

「…………」

勇一「え！後で行くって？」

涙子「うん、ちょっとやりたいことがあるから 先に行つて」

勇一「あ…うん、わかつた」

「…………」

やりたいこと？なんだろう……

そう言つてゐるうちに約束の場所についた。そこには可愛いワンピー

ス服と造花のカチューシャをした初春がいた。

勇一「あ！やあ、初春」

初春「あ！こんにちは勇一君」

勇一「今日の誘いありがとう」

初春「いえいえ、あれ？サテンさんは？」

勇一「あ～涙子はやりたいことがあるから後で来るつて言つてたけど」

初春「やりたいこと？」

とその時、初春の後ろに影の人体が

？「う～い～は～る！」

いきなり初春の後ろから涙子が笑顔満遍なく現れ、初春のスカートが涙子の方に開いた。俺はびっくりして言葉が出なかつた。

初春「きやーーーー！」

涙子「おっ久さーーー！初春 おっ！今日は限定のシマパンだね」

初春「おっ久さじやないですよーーーいつもいつもスカートめくらないで下さいー、だいたいサテンさんは……」

勇一「まあまあ、そういうば御坂と白井は？」

初春「え？あ～御坂さんと白井さんはもうすぐ来ます」

初春がそういうと本当に來た。

御坂「ヤツホー勇一君」

勇一「あ！御坂」

御坂「勇一君みても変わつてないね」

勇一「御坂も変わらないところがあるんじやない？」

御坂「！～～ど…どこみてんのよ！」

その後 僕の言葉に続いて誰かが言つた。

？「さすが勇一君、お姉さまが気になつてるとこをズバリ当てるな

んて」

御坂「つて隠れてないで出てきなさいよ黒子ー」

黒子「さすがお姉さん～」

黒子は木の影からでて御坂に飛びついた。なんだかんだで仲がいいのかな～

勇一「それで初春、今日は遊びますの？久々に集まつたけど」

初春「そうですね～久々にみんなでいろいろなところ回りましょ～」

御坂「いいわね みんなで行きましょう」

涙子「よ～しそれじゃ私が案内しますよ」

ともかくにも涙子が1番に出てあとのみんなは涙子について行つた。俺達はゲーセン、買い物、パフェ的、遊園地など行つた。遊園地の場合、御坂はカエルの着ぐるみに近寄つてなんだが楽しそうだつたな～

そして時間帯は夕方、結構楽しかつた。

御坂「ふう～疲れたわね」

黒子「全くお姉さま、物の限度といつもの知らないですの？……

その袋」

御坂「い…いいじゃない別に1つや2つ」

御坂の手には袋詰めが2つあつた。多分なんか好きな物を買つたんだろう。

初春「今日は楽しかつたですね」

涙子「そうだね初春、またみんなで行きいね」

勇一「そ… そうだね」

今日は本当に振り回されたようなつかれだ

黒子「でもこ～して再び集まつて楽しい思い出がまた1つ出来ました、勇一君、サテンさん、初春本当にありがとうございます」

御坂「私からも礼を言つわ」

勇一「いやいや こっちこそありがとう」

初春「それじゃ私達はこれで サテンさん、勇一君」

涙子「うん またね 白井さん、御坂さん、初春」

俺と涙子は初春と黒子と御坂と別れた。

涙子「あ～そうだ～ちょうど外に出ているんだし夕飯の買ひ出しだ

付き合つて勇一君

勇一「え！あ…まあ…」

唐突すぎるけど買い出しに付き合つことにした。とある近くのスーパーで夕飯の買い出しをし、そして終わると抽選券がもらえた。この抽選券を抽選会の店員に渡しガラガラを回した。すると出たのは468の玉が出てきた。

店員「おめでとうございます。番号が出たあなた様は次回のチャンスに参加出来ますのでくれぐれも持つて下さい」

そう言われ、スーパーを出た。

涙子「良かったね 次回もチャンスあるつて」

勇一「そうだね」

涙子の手には袋いっぱいにあつた。すると向こうに御坂らしき人がいた。俺と涙子は御坂らしき人に近付いてみた。後ろ姿は本当に御坂が似ている

勇一「御坂…さん？」

涙子「はい？」

勇一「そこに御坂がいたから」

ミサカ「そうですか、ですがミサカは今から行かなくてはならないところがありますからとミサカは2人に注意事項を言います」

ミサカはそのまま俺達を置いて走りさつた。

涙子「なんだつたんだろ御坂さん」

勇一「なんかおかしいような」

涙子「まつ、御坂さんには用があるんだと思つから、家に帰らつ」

勇一「そうだね」

結局ミサカのことを見過しし家に帰る」とした

END

じめの科学ルート（後書き）

どうでしたか？

とある科学に魔術のミサカ妹を出させて見ました。
とある科学の涙子ととある魔術のミサカのコラボ
たつた1シーンだけやってみました。

なかなか会うことがない2人

ミニミサカと上条とインテックスを出そうと思いましたが字数的に
少なくなりそうなので止めました。

次回は2作アニメをどちらか出そうか迷つてます

ISか迷い猫か

ぜひ感想をお願いします

ルートHS（インフィニッシュトストラトス）編（前書き）

どうも

今回制作したきっかけはつい最近見て、見終わつたところです。ヒロイン達が可愛くて小説にしてみました。

好きなヒロインは

ラウラ・ボーデヴィッヒ

臨海学校に行く時、ラウラの固く厳しいイメージが崩れ、誉められるものすごい「レーデレ」になるところが好きです
まあ今回は「レーデレ」の様子は作つてないです そしてヒロイン達が勇一に相談をするために……

ルートHS（インハイリッシュストラトス）編

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・4話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて來た。

？？「おいーそこのお前！」

俺は自分のことだと思い振り向いた。するとそこには篠ノゾ篠がいた。

勇一「ん？！篠！お前か！」

篠「お前か　じゃない！勇一」

勇一「何？」

篠「実はお前に話が……」

とその時ちょうど学校のチャイムが鳴ってしまった。

篠「あ！…………くつ！しかたがないまたあとメールするから絶対に来いよ！…」

そういうつて篠は自分の教室に戻りに行つた。

勇一「ん？なんだ篠？」

俺も素早く自分の教室へと行つた。

そして時間は過ぎていき昼飯の時間になつた。

枯渴「勇一　みんなでめし食いに行こうぜ」

勇一「ああ…」

ちょっと待つてそういうえば今朝篠がメールするつて言つてたあれ

俺はすぐ携帯のメールをチェックした。篠からのメールは

（篠「今日の昼　屋上で話会うから来い！」）

なんとも単純な普通のメール　でも断るわけにはいかない

勇一「すまん枯渴、やっぱいいわ　ちょっと別のだちに誘われてるから」

枯渴「あ～それなら仕方がないか、じゃ俺から伝えておくよ」

勇一「悪いな　枯渴」枯渴「いいつてことよ　それより早く行つて

やんよ」

勇一「ああ すまんな」

俺は篠の方に優先し枯渴にはみんなに軽い事情を言わせる」といった。そして屋上に到着、ちょうど篠がいた。

勇一「おー篠」

篠「ん？ おつ 勇一やつと来たか」

勇一「全く篠は、俺に何を伝えたいんだ？」

篠「実はなー、い… 一夏のこと…なんだが お前親友…なんだろ？」

俺は一夏のことを思つた。そういうえば一夏とは確かに親友だつたな

勇一「確かに親友だ、それで一夏がどうした？」

篠「実は、い… 一夏が私のことを構つてくれないんだ！」

こいつのつて悩みの相談じゃないか！

勇一「それは逆に篠が原因なのでは…？」

篠「なつ！ それはどうゆうことだ！」

篠はいきなり俺の胸ぐらをつかみ威嚇した。

勇一「だつて… 篠は一夏の前では素直になれないし、ケンカとか見るし、嫉妬とかしてゐるし、今日の一夏は呆れてるんだよ」

篠は俺の胸ぐらを離した。

篠「うつ… じゃどうすればいいんだ？」

勇一「そうだなー 一夏を誘つてデートしな…」

篠「なー何！」

勇一「ががががが…（弁当食つてる音）でなわけで篠は頑張つて一夏にデートの約束をするんだ、もし約束したら篠をサポートをしてやるよ」

俺は弁当を食べ終わり元あつた袋にもどした。

篠「えーちょっとそれは…！」

勇一「それじゃ頑張れよ！」

俺は急いで篠から置いて逃げ屋上から降り3階へとついた。

勇一「全く篠は、幼なじみなんだから何とかなるんじゃないのかよ」と言しながら歩いていると後ろから……

？「見つけた　　！」

俺が振り向く瞬間、走ってきた人と激突し、一緒に壁まで飛んだ。

勇一「いたたた……って誰だよ！　！　鳳鈴音じやないか」

俺の上に乗っているのは一夏のセカンド幼なじみ鳳鈴音 通称・鈴

鈴「勇一、あんたに聞きたいことがある」

勇一「なんだよ」

鈴「一夏をじうやつたら独り占め出来るの？」

またもや相談かい……第に続いて鈴まで

勇一「はー！俺が知るわけないだろ！」

鈴「いいから教えなさいよ！あんた一夏の親友でしょ！」

俺は鈴に体を揺らされた。反対のことを言つたら面倒になりかねん、仕方なく教えるか

勇一「それじや一夏を強引に連れ出して、2人きりになれる場所に行つて、いちゃいちゃすればいいんじゃない？」

鈴「な！何を言つてるのバカ！」

勇一「ぐふつ！」

おもいつきり殴られた俺

鈴「でも考えてみれば悪くないわね～」

鈴はやつと俺の上から降りた。

鈴「あんたの考え 使わせてもらつから、あとでメールするからそれじやね」

鈴はこの場から走り一夏のとこに行つたのかもしれない。

勇一「たくつ やれやれだぜ～」

鈴から解放された俺はなぜか調理室の前にいた。すると後ろから声をかけられた。これつてデジヤヴ？

？「勇一さん」

俺が振り向くとそこには金髪で美しい外国美女のセシリ亞・オルコ

ット

勇一「おおーセシリ亞！今日はどうした？」

セシリ亞「実はですね、一夏さんにわたくしの弁当を食べさせたい

のですが、一夏さんあまりお気に召せなかつたようなんです。『ひつしたらしいでしょ？』

おいおい簫や鈴の次はセシリ亞かよ……全く今日はなんなんだよ……

勇一「そ……それは、セシリ亞の弁当に問題がある…」

セシリ亞「わ……わたくしの……弁当に…！」

勇一「正直に言つと、だな……セシリ亞の弁当はひょつと味が強すぎたんだ、もうちょっとさじ加減を……」

セシリ亞「酷いですわ、わたくしの味を嫌うなんて」

勇一「ち、違うんだセシリ亞！ 僕はただ味が強いから一緒に作つて一夏を喜ばそうと、もちろん僕はサポートをするから」

セシリ亞「それって本当ですか？」

勇一「ほ、本当！ 本当だつて！」

セシリ亞「わかりました。勇一さんがわたくしの下部になるといつことで許してあげましょ？」

あれ？ セシリ亞は何か誤解をしているような気がする 僕はひょつと考えて黙つた。

セシリ亞「では勇一さん、メールで連絡しますのでその時にお願いします」

勇一「え？ あ、はい」

セシリ亞は来た道を戻つて行つた。全く次から次へと……

僕は1階の渡り廊下を歩いていると、とてもない声で僕をひだ。

？「勇一……！」 勇一「ん？」

僕は振り向くと2メートル離れたところに眼帯をした白き髪の女の子が僕に向けてピストルを……ピ……ピストル！

眼帯の白き女の子はピストルを撃つた。僕は思わず田をつぶつた。

勇一「…………ん？」

僕は恐る恐る目を開けると、あれ？ 撃たれてもないし、壁に当たつた音もしない

？「「これぐらいのことで何をびびつておる？」

眼帯の白き女の子はピストルを構え終えると俺の方に向かつて話かけて來た。

？「勇一、お前 私の嫁の親友だつたな

勇一「久しぶりにあつたと思えばいきなりそれかよ ラウラ」そうこの女の子ちよつといかつきりつとした白き髪をして眼帯をした外国美女のラウラ・ボーデヴィッヒ

勇一「確かに一夏とは親友だ」

ラウラ「なら話が早い 私の嫁が私のことをどうすれば好きになつてくれるか教える！」

勇一「そ…そんなこと言われても」

ラウラ「私の命令が聞けないのか！」

ラウラは鈴・簞同様胸ぐらをつかんだ。

勇一「ちょっと待つて！ 俺だつて異性に告白したことがないんだ！」

ラウラ「くつ！たわけ！」

ラウラは俺の胸ぐらを離し、俺は地面に倒した。

勇一「いつたたたた、だから俺が一夏を誘つておくし、それなりのセリフを考えておくから」

ラウラ「本当だろな！」

勇一「本当だつて、男に一言はない」

ラウラ「ふつ、ならば待つてる」

ラウラはそのまま俺を過ぎて去つて行つた。やべーな、早いひつけやつておかないと何されるかわかつたもんじやない

そして時間が進み

（放課後）

学校出る時、またもや女の子が俺に話かけて來た。もう俺はゲームやアニメの主人公か！

？「ねえ もしかして勇一君？」

俺は振り向いた。そこには金髪で長髪でスカートが短く可愛い女の

子 シャルロット・ジユノア

勇一 「シャルロット！」

シャルロット「良かった。ねえ一緒に帰らない？」

シャルロットは笑顔満々だった。結局一緒に帰ることになった。

勇一 「ねえ シャルロット悩み聞いていいか？」

シャルロット「何か？」

勇一 「聞いてよ！ 篠や鈴、セシリヤやラウラ達が一夏のことと俺に相談するんだよ！」

シャルロット「それはみんな一夏のことが好きなんだよ」

勇一 「はあ！ 本当疲れるな！」

なんで俺に相談するのかな？ 俺以外に相談相手がいるだろ、確かに一夏はもてるだろ？ よ

勇一 「あ！ そういえば買い物 頼まれてたんだ」

シャルロット「それじゃ僕も付き合つよ」

勇一 「そんな！ 悪いって」

シャルロット「いいから いいから遠慮はいらないよ」

シャルロットは優しい人、俺が見る時は優しく接していて本当可愛くて……

シャルロット「どうしたの？ 顔赤いよ」

勇一 「え！ べ…… 別に」

シャルロットと微妙な感じで話しているとあるスーパーに来た。勇一はカバンから今日の夕食メモを取り、メモ通りの食材を買った。食材は袋に詰めたが2つ分の重さ、そんでシャルロットに1袋持つてもらつた。

勇一 「今日の買い物 手伝ってくれてありがとう」

シャルロット「そんないいって 当たり前のこととしたまでだつて」

勇一 「それじゃ シャルロットは一夏のこと好き？」

シャルロット「……な……なんで……！」

勇一 「だつてシャルロットも一夏のこと好きそうなんだもん」

俺とシャルロットは一緒に家まで帰ることにた。本当振り回される

男はつらいぜ

シャルロット「勇一のバカ」

シャルロットが何か言ったようなきがしたけど俺は無視して一緒に帰つた。

END

ルートHS（インハイニッシュトストラトス）編（後書き）

再びどうも

2次元美女っ子です 名前覚えてもらえたでしょうか?
ISのルートどうだつたでしょつか?

ちゃんとヒロイン達の相手をしましたがIS主人公は出すことは出来ませんでした お話は続を作るためにしました。続きは後々に考えておきます。その時はIS主人公も出します。
またまたすきなヒロインはシャルロットと篝ですね

ちょっと長々としましたがまだまだルート話は後半になります

最後に一言

「早くルート話を終わらせた い!!」

次回でまた会いましょう

迷い猫オーバーラン ルート（前書き）

いつも 2次元美女っ子です
今日は迷い猫つてしたらかぶるじやんーと思つて正式名称にしました。

まあ迷い猫だから……猫でしょつ
まあ「ゆつくり見てください

迷い猫オーバーラン ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・5話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

？？「ちょっとそこのあるな」

勇一「はい？」

俺は振り向いた。あれ？誰もいない

勇一「おかしいな 呼ばれたような

？「ちょっと！無視しないでよ！」

勇一「ん？あ～そこにいたのか千世」

この子が…って言つたら悪いけど髪がオレンジ色でちょっと長く背
が少し小さい女の子

それが梅ノ森 千世 彼女は金持ちの癖によく威張つてる

千世「いたのじゃないわよ あなたを呼んでからずっといたわ！」

勇一「ごめん」「めん」

千世「まつたく、ってそうじゃなくてあなたに話がある」

勇一「何？」

千世「あんた キャットパークを知ってる？」

千世はいきなり英語風に言つた。なんだそのキャットパーク？

勇一「知らないけど」

千世「そこわね いろんな名国から集まつて来た猫ちゃんがいるの

よ

勇一「ね…猫！」

まじかよ～ 猫って言つたら猫耳やわらかふわふわの毛と可愛い
尻尾、そして柔らかい肉球！

俺は大の猫好き、猫を見て触ると全体的になまつてしまつほど猫が
大好き、と上の空を見ていた

千世「ちょっと……聞いてる？」

勇一「！ 聞いてる聞いてる」

千世「あつそ それであんた大人数で来てくれない？」

勇一「大人数？ なんで？」

千世「決まってるじゃない キャットパークは5人以上じゃないと入れないんだからね！」

そんなに大人数で来てほしいのかとなれば金が心配、

勇一「じゃ入場料はどうするの？」

千世「大丈夫 入場料は私に任せなさい、あんたは大人数でくればいいから」

勇一「はあ」

こうして俺は入場料のことは千世に任せることにして俺はまず姉達に行くかどうか聞くことにした。そして天川家に帰宅、まず涙ねえに聞いた。

涙子「え！ キャットパーク？」

勇一「そうそう、涙ねえは行く？」

涙子は今夕飯を作っていた。

涙子「うん、行くよ 子猫ちゃん見てみたいし

涙ねえはOKつと

次は……桐乃か？ 俺はちょっと気が引けた、桐乃是今ソファで雑誌を読んでる

勇一「桐乃……」

桐乃「何？」

勇一「俺の友達がキャットパークいわゆる猫園に行くんだけど……」

桐乃是行くのか？」

桐乃是聞く耳持たない態度でいたが反応はしていた、雑誌を読んで

桐乃「行かない あたしモデル活動があるから」

勇一「そうか……ならいつか」

俺は桐乃がいる場所からはなれ2階にいる梓の部屋に向かった。部屋のドアをノックし返事を聞いた。

勇一「梓いる？」

梓「うん、入つて」

俺は梓の言つまま入つた。

梓「お兄ちゃん 何か用?」

勇一「実は友達からキャットパークに誘われたんだ、んで俺と涙子は行くことになつてるけど梓は行く?」

梓「キャットパークうん、私も行く」

勇一「わかつた、じゃ夕飯の時に改めて言つから」

と俺は部屋から出る。するとそこにパジャマ姿の希がいた。

勇一「！希いたのか……まさか話聞いた?」

希「うん」

勇一「じゃ……行く?」

希「うん」

勇一「わ……わかつた」

会話終了後、希は1階に降りて行つた。そして10分後、夕飯の食卓、俺はそこで時間や日時と場所を教えた。そのあとは普通に過ごした。

そして約束の日、千世とメイド2人佐藤と鈴木はキャットパーク駐車場にいた。もちろん高級ロング車で来て待つてゐる。すると高級車の後ろから天川達が來た。

勇一「ごめんごめん、待つた?」

千世「ふつ、少し遅いわよ！」

涙子「いや～家から駅に行つてそれから電車で向かつてやつとこれたんだもん」

千世「……」れ、あんたの知り合い?」

千世は俺に向かつて言つた。はい、そうです……なんて言つたら千世はびつくりするから言わないでおひづ。

勇一「まあ そういうこと」

千世「あつそ……あれ? なんで文乃がいるわけ!」

文乃「何よ！ いや悪い！」

勇一「一応文乃も呼んだんだ」

千世「ふうん わかつたわ、それじゃ無駄話はここまでにして早く行きましょう」

文乃「なんであいつが仕切つているのよ！」

勇一「まあまあ文乃、それじゃ涙ねえ、梓、希、行くか！」

涙子「うん」

梓「はい」

希「いや～」

というわけでキャットパークに入ることにした。そこには各世界から集まつてきた珍しい猫や愛くるしい猫などいる。ちなみに勇一達は朝一番手に来ていた。

勇一「な～千世 ここに入場料はいくらなんだ？」

俺はみんなに聞こえないように千世だけに小声で言った。

千世「ざつと2・500円よ」

勇一「高！」

千世「まあ本当は5・000円だけど、私の力とこの割引で全員合わせて半額にしてやつたから感謝しなさい」

勇一「はあ～」

ホントそれには千世に感謝だな、そして俺と涙ねえと梓と佐藤さん、文乃と希と鈴木さんで別々に見に行つた。

俺達はまず日本産の猫を見に行つた。

涙子「うわあ 可愛い猫いっぽい！」

梓「ホントだ可愛い！」

涙子「抱いてもいいかな？」

千世「いいわよ

涙子「やつた！」

梓「じゃ その次私も

2人共なんだが嬉しそう、もう笑顔見るだけで幸せだ。（よくある

一言）

勇一「じゃ俺、文乃達のとこ行つてくる」

涙子「うん、わかった」

梓「行つてらつしゃいお兄ちゃん」

佐藤「彼女達は私が見ておきますので」

俺は涙ねえ達を置いて文乃達のところに行つた。

2分後、文乃達を見つけた。

勇一「や 文乃と希と… 鈴木さん、その猫何産？」

希「この猫はアメリカ生まれで…」

急に希が抱いてる猫のことを説明し始めた。俺と文乃は全然わからず目が点になり?を浮かべた。

希「……で、この猫がそうゆう風な名前」

文乃「そう…す…すごいわね」

勇一「め…珍しい…んだね」

鈴木「希さんは猫のこと詳しいんですね」

希「にゃ~ 好きだから」

まあ…想像はつくけど

文乃「で、あんた何しに来たわけ?」

勇一「そりやあ様子を」

文乃「あつそ」

あつさりきられた、……………ともかくにも俺達は今まで世界の猫、子猫を見物した。そんでもって脣^フ外でピクニック気分的をしていた。

勇一「おいしい、おいしいよ千世」

千世「そ…そ…! 私なりに頑張つただがら

まあ偉そうな態度…

佐藤「そこをこの佐藤と」

鈴木「このわたくし鈴木がサポートしましたわ」

千世「ば…バカ! 余計なこと言つな!」

千世つて頑張つてるんだね見えないとこで

涙子「お弁当ありがとうね、私弁当作るのを忘れたのにこんなにいっぱい用意してくれたんだものありがとうね…あーそこのタコさん

ウインナーは私の!」

梓「涙ねえはそこにあるとこだよ…」

希「卵巻き おいしい」

文乃「まあ今回は、あんたの分を食べさせていただくわよ
こうして楽しい半日は思い出になつた。」

勇一「それじゃ 帰りますか」

千世「え！ もう帰るの…」

勇一「ごめん、もう帰らないと夕方になつてしまつ距離なんだ」

ホントここまで電車で1時間くらいかかるてしまうんだ。その分涙
ねえにもちょっとは出したんだけど

千世「それじゃ私が送り返してあげるわ」

勇一「ホント！ ありがとう千世 涙ねえこれで楽に帰れるね

涙子「うん、それじゃお言葉に甘えて」

俺達は千世が乗る高級車で帰ることが出来た。高級車の中には前に
佐藤さんと千世と鈴木さん真ん中には、涙ねえと文乃、後ろは俺、
梓、希 ちょっと今の環境は言葉がでにくい
30分後、やっと家についた。

勇一「今日は本当にありがとうございました 誘ってくれたり、お弁当食べさせ
てくれたり、送り迎えしてくれたり感謝するよ」

涙子「ありがとうございます」

梓「ありがとうございます」

千世「別に、いいわよ また誘つてあげるわ」

佐藤「文乃様は私達が」

鈴木「送つて行きますので」

勇一「ありがとうございます。文乃、またな」

文乃「じゃ また」

高級車は前進し、俺達が見えなくなるまで行つた。

涙子「今日はちょっと疲れたから休むとしましょうか？」

勇一「だな……」

俺達は家に入り、いつもと変わらない日常を過ごした。

E
N
D

迷い猫オーバーラン ルート（後書き）

どうでしょ？

ホント見ている人はちゃんと感想までしてくれます？出来ればかい
てほしいのですが

今まで投稿してきたアニメが分からぬ場合は本編のアニメを見て
からじやないとわかりずらいと思います
では次回からパーソナルラジオ局みたいにやつていきますので、あ
とゲストを呼んじゃいますので
お楽しみ

バカテスルート（前書き）

どうも2次元美女つ子です
我ながら遅く始まりますが
今日からラジオ的なミニトークをしていきたいと思います。
ではバカテスルート編の後で後ほど
楽しく読んで下さい。

バカテスルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・6話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

？？「あの～勇一君」

勇一「はい」

俺は振り向くとそこに髪はピンク色で目はパープル色で胸が非常にでかいし、スカートがちょっと短くて（体操座りしたら見えてしまう）スタイルがいい美女の姫路瑞希さん、でも姫路さんがなんで俺に？

姫路「あの～勇一君…ですよね？」

勇一「あ…はい、そうですが…」

姫路「良かつた、ちょっと聞きたいことがあるの」

勇一「聞きたいこと？」

何だろ、姫路さんが俺に？優秀な姫路さんが俺に？」

姫路「実は明久君が私のことをどう思つているか知りたいんです」

勇一「姫路さん…それは自分から言つた方が…」

姫路「あ…明久君の前で言つのは恥ずかしい」

姫路さんは顔を赤くして手を頬に当て背いた。まあ女の子だし好きな人に目の前で言つるのは誰だつて恥ずかしい、きっと姫路さんは明久のことが好きだと思う、ここはこの俺が愛のキューピットを…

勇一「姫路さん！」

姫路「はい！」

勇一「ここは俺に任せて」

姫路「え？任せるつて…」

俺は振り返り、教室へ向かつた。

勇一「また後ほど伝えるから」

姫路「一体どうするんでしょうか…」

（廊下にて）

勇一「雄一、お願ひ！協力して」

俺が頼んでいる人は坂本雄一、あるやつらだけは頼れる存在であつて悪友でもある

雄一「どうしてだ？」

勇一「姫路さんはきっと明久のことが好きなんだよ だから姫路さんの恋を実らせよ！」

雄一「お前な、あいつらの関係に割り込むのか」

勇一「なんだよ！雄一は霧島さんといちやいぢやして」

雄一「あれば翔子が勝つてにして、俺は……」

？「……雄一、今何か言つた？」

雄一「しょ……翔子！なぜお前がここに……」

え つと、雄一の後ろに現れたのは霧島翔子、学力主席N.O.1で

雄一のことをずつと好きとか

霧島「……雄一が私のうわさをしてるか？」

雄一「別にうわさじやねえし…お前の」とじや…さやあああ

霧島「……雄一連れて行く」

なぜか霧島さんが雄一にスタンガンで気絶させ、連れていかれた。

雄一……。○、俺が話しかけたのが悪かった、仕方ない秀吉に頼むか…

俺は別クラスへ行き、そして秀吉を呼んだ。

秀吉「なんじや 何かようかの～」

勇一「実は姫路さんの恋を実らせようと」

秀吉「相手は誰じや？」

勇一「明久を」

秀吉「おおーこれはまた どうして」

勇一「姫路さんは明久のことがきっと好きなんだよ…だから告白大作戦！をしよう」

秀吉「また大胆に……」

俺は1年前に雄一と霧島さんをラブラブ大作戦をしたが見事に失敗

……だが今回は絶対に成功してみせる！ と俺は心にそう決めた！
というわけで翌日の休みの日、俺は秀吉と姫路さんを呼んである公園に来た。

姫路「あの～私をよんでも何をするつもりなんですか？」

秀吉「そりじゃ勇一、わしらを呼んだ理由はなんじゃ？」

勇一「2人を呼んだのは秀吉と俺は姫路さんをサポートして姫路さんを明久に告白するといつもちこみ企画～！」

姫路「…………ちよ……ちょっと勇一…………わ…………私はそんな急に……！」

姫路さん近いし顔火照ってるし、第一胸が当たってるし……

秀吉「まさか……あの話しさは本気だつたか……」

俺の手は姫路さんの肩を掴んで少し押して秀吉に返した。

勇一「当たり前だ、俺が嘘言つわけがない…………あ……」

俺は無意識で姫路さんの肩を掴んで、パツと離した。

秀吉「で、どうするのじや？」

俺は2人に厚紙の束を見せた。

勇一「このルートフラグ形式でする」

俺が考えて作つて来た「恋愛フラグ」別名、ギャルゲーフラグ、それはあるヒロインをルート選択して進むことで、HAPPYEND、BADEENDなどで物語は終わるといつ

秀吉「まさかこの厚紙の束を」

姫路「作つてきたんですか！？」

勇一「ああ、そうさ姫路さんの恋物語を始めるために！」

姫路「気持ちはあるがたいのですが……私は……別に……」

姫路さんはなぜか否定的に抑えているが……俺は！

勇一「というわけで明後日実行するから、姫路さんこのシナリオ束を明後日まで覚えてくる」と……

姫路「あつはい！！」

秀吉（もし姫路ではなく霧島だったなら今日中全部覚えてきそうじやかな）

俺はこんなこと言つてもいいのか、なんかいつも俺じゃない気がするが言つてしまつた以上やるしかない！…………ちょっと冷や汗と焦りあらわに出てきた。

それから2日後、俺が考えて作った恋愛シナリオルート、姫路さんは本当に覚えてきたのかな～俺は校門で待つていると姫路さんが駆け足で来た。

姫路「おはようございます」

勇一「おはよう姫路さん、シナリオ覚えて来た？」

姫路「あつ！はい 大丈夫です」

勇一「よし！作戦実行だ」

その前に説明をしとかないといけない、簡単に言つと

ステップ1・明久と偶然あつて一緒に登校、そして邪魔者は俺と秀吉で排除する ステップ2・ペンをさりげなく明久に気づくように落とし、タイミングを見て触れる感覚で取る なお邪魔者は排除 ステップ3・体育の授業でさりげなく明久に接触 邪魔者は排除！ステップ4・姫路さんの弁当を明久に食べさせ……

勇一「明久…………だ…誰にやられた！」

明久「うぐうぐうぐ…………がくつ」

勇一「明久…………！」

俺は倒れてる明久の体を持つて叫んだ

秀吉「やれやれ～」

ひ…姫路さんの弁当は恐ろしい…………とハプニングがありつつ

ス…ステップ…5

たまたま明久を見つけ近くなつたら姫路さんを押してぶつける！…

…これは姫路さんには教えてないけど

ステップ6・明久を屋上に誘う

そしてステップ7…………つていつの間にかすでにステップ7まで…

… そう告白の時

ここまでいくつかのハプニングがあつたけど今回はいける！

姫路「あ…明久君……私…」

明久「ひ…姫路さん…」

これは…

姫路「私…好きです！明久君の…」が…」

明久「姫路さん！」

秀吉（これは決まりじゃな）
ああ そうだな

勇一

俺と秀吉は屋上行き階段のドアで「」と見ていた。「」まで來たらもう見なくても大丈夫だろ、（あとは外部の人任せるよ）すると階段の下から声がした。

？「勇一…！」

俺と秀吉は声がする方に顔を向けた。

？「お前を殺す！」

勇一「なんか雄二が追っかけてきた…！」

秀吉「よつぽど恨みがあるんじやろ…！」

勇一「仕方ない、あの人を呼ぶか」

秀吉「呼ぶって誰を？」

俺は指を鳴らし、ある人を呼んだ、それは屋上行きの1階段前に現れた

雄二「なつ！翔子！なぜお前がここに…！」

霧島「…ある人から雄二を止めるように言われた」

雄二「くそつ！絶対殺す！」

霧島「…だから雄二、私と結婚しよ」

雄二「うわあああ…！」来るな…！」

雄二は霧島さんに追いかけられて逃げた、雄二…お前とは一生悪友だ、俺は外面を笑顔、内面はえげつない悪い顔で雄二を見送った。そして下校の時

勇一「はあ…なんだが疲れたな…」

秀吉「今日は半日中頑張ったからじゃな、お疲れさんじや」

勇一「ありがとう、秀吉」

？「…お主、秘蔵写真はいらんかね…」

勇一「！その声は！」

秀吉「ムツツリーー！」

ムツツリーーって言うけど本名は土屋康太、ただのムツツリスケベ
けどいいやつ土屋「……勇一の好きな人はこれ」

こ…これは！あ…梓のメイド猫耳、そして希のスク水、涙ねえの猫
耳メイド、猫耳体操服の桐乃 も…萌え！！！！

勇一「この4枚いくら！」

土屋「……2000円で交渉」

1枚500円…背にはかえられない

勇一「4枚買つた！」土屋「……成立！」

秀吉「全く、勇一は……」

俺は秘蔵写真をゲット……ってこんな梓と涙ねえと桐乃に見せ
たら怒られる、見つからないように隠して置かないと、
そして1週間後、梓 と桐乃と涙ねえに秘蔵写真が見つかって激怒
されたのは言つまでもない……END

バカテスルート（後書き）

ラジオ的なミニトーク

2次元美「こんにちは 原作者2次元美女つ子です 」

明久「名前長いよ！」

2次元美「おお！今日のゲスト」

明久「初めまして 吉井明久です」

2次元美「よしつ！本題に入るか」

明久「切り替えはやつ！そして何も触れずスルーかよ！」

2次元美「今日はバカテスルートだけど まさかの明久と姫路さんが恋人になるなんて夢の話だな～」

明久「ちょっと夢で終わらせないでよ！たまにはしたつていいじゃない……つてあれ？2次元美さん？」

FFF団「吉井明久を殺せ！！！」

明久「げつ！異端審問会のみんな！」

須川「判決を下る、とつと死刑！」

明久「た、助けて～」

2次元美「まあ～巻き添えされたくないから避けておこう、なんかしょうもない回で始まつたけど 見て読んでいる人達よ、楽しくいこうぜ！」

明久「助けて～神様～」

2次元美「では次回もゲストを招いて会いましょう」

FFF団「吉井明久は裏切り者じゃ～～！」

とある魔術ルート（前書き）

こんにちは 2次元美少女っ子です

今回はとある科学を出したんで魔術も出してみました
でも登場キャラはたった数人 科学メインは4人だけ
魔術メインは2人ぐらいで

僕もとあるシリーズは全部見ました

ホント面白いし、シリアルですごかつたと思います
とある魔術ルートは勇一とインデックスと当麻のそんな絡みです
上条の字が間違っていますのでお願いします

とある魔術ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・7話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて來た。

？「もしかして勇一？」

勇一「はい？」

俺は振り向くとそこに美少女の学生がいた。髪が長く緑色の瞳に薄青髪のちょっと小さい女の子

？「やっぱり勇一だつたね」

勇一「あの～誰ですか？」

その後、沈黙が続き彼女が言い返して來た。

？「誰ですかじゃないよ～！　インデックス！上條インデックス！　

勇一「あ～！インデックスか～、って上條！」

インデックス「そつ、私は上條という名字で登校してるから」

インデックスは自信満々とした。そんなバカな！1年前は普通のインデックスだった、

インデックス「あと言つておくけど、料理、掃除、弁当作り、当麻やスフインクスの世話など自分で出来るもん」

なのに、俺が知つてゐるインデックスなわけがない！

勇一「と……ところで俺になんの用？」

インデックス「あ！そうだつた 勇一に相談があるの」

まさかこれつて人生相談！（俺妹キタ　！！）

というのは冗談で、昼休み時間はインデックスと一緒に弁当を食べるのが……

インデックス「さてと、お弁当～お弁当～

屋上にはよくあるベンチが、1つや2つそしてベンチに座りそこで弁当を食つう。

勇一「なんだか嬉しそうだな」

インデックス「うん、だつてお腹空いたんだもん」

インデックスは鞄から弁当を取り出そうとあさつていて
インデックス「あれ？…ない！ない！私の弁当…」

勇一「おいおい、しつかりしろよ」

インデックスが潤い涙をしていると屋上ドアから上條当麻が包んだ
物を持って来た。

当麻「ここにいたかインデックス」

インデックス「う～当麻～」

当麻「お前が忘れてると思ってほり、

持つて来てやつたぞ」

インデックス「当麻！ありがと」

当麻「それじゃ俺は行くからな」

結果的に当麻は忘れてた弁当をインデックスに届けていたつてこと
かな、

勇一「なあ、俺に相談するんじやないのか？」

インデックス「あ！そうだつた、また忘れてた」

勇一「やれやれ～」

インデックスは弁当食べながら俺に話した。その内容は、インデッ
クスの友達や当麻のこと、スフィンクスのことなどいろいろ話して
くれた。その時のインデックスの顔は笑顔でいた。俺は今まで振り
回され来たけど、やっぱ一番は笑顔を女の子かな…………なんて
思つたりする。

インデックス「勇一！私の話し聞いてる？」

勇一「！？うん、聞いてる聞いてる」

インデックス「本当に？」

勇一「本当だつて」

インデックス「あつそ、それじゃ勇一放課後時間ある？」

勇一「う～ん、確かにあるけど」

インデックス「本当！？それじゃ放課後校門で待ち合わせだよ

勇一「あいよ」

というわけでインデックスと約束しました。インデックスは楽しそうにしてたけど一体何の用なのかな

午後の時間が過ぎて放課後

俺は待ち合わせの場所、校門へと向かった。すると本当にインデックスがいた。それは彼女が彼氏を待っている姿……を想像する

勇一「インデックス！」

インデックス「あ！ 勇一」

勇一「俺を呼んでどうすんの？」

インデックス「ふつふつふ」実はセブンスミストに買い物するんだけど勇一が決めてほしいの

勇一「おいおい、それぐらい自分で出来るだろ！」

インデックス「だつて私だけじゃ決められないんだもん

そして校門から歩いて20分、セブンスミストに着き、さっそく洋服店を見た。

インデックス「ねえねえこの服可愛い！ね」

勇一「本當だ！ この服インデックスが来たらより可愛くなるんじゃないか？」

インデックス「そ……そつかな

勇一「試しに着てみたら？」

インデックス「勇一が……そう言つだつたら着てみる」

インデックスは頬を赤るめて店の服を持つて試着室に入つた。さてこれからが女の子の試着が妙に長い時間だ、この間に何をするかだな

インデックス「きや！ 」

勇一「！？ インデックス！」

俺はインデックスの悲鳴を聴いてダッシュで試着室に行つてカーテンを開けた。するとそこには学生服は脱いでて試着服はまだ着てない状態（いわゆる今下着だけ）

え？ まだ着てない？ しかもピンクの下着……カワユス！

インデックス「な……な……」

勇一「いや……その……これは……」

インデックス「なに見てんのよー！」の変態お馬鹿！」ガブツ！

勇一「ぎやああああ……！」

そして俺はベンチで座っていた。それはショックが大きすぎて落ち込む姿だった

勇一「はあ～～」

たくつ、俺は一体何をしてるんだ！自分が情けない……俺は顔を上げ店内の周りを見始めた。するとなにやら年の差の男女2人がいた。同じ年ぽい銀バーの不良少年とちっちゃくて妹みたいな可愛い女の子、俺はその2人の会話を目で見ていた。

打ち止め「早く早く～急がないと遅れちゃうつてミサカはミサカは急ぎのおねだりをしてみたり」

一方通行「だつたらお前だけ行けばいいだろ！」

打ち止め「ミサカはアクセラレータと行きたいつてミサカはミサカはただをこねてみたり」

アクセラレータ「チツ！だからガキというものは」
2人はそのまま進行方向を変えず行ってしまった。

勇一「なんだあの人」

俺がそう思つていると前から当麻がやつてきた。

当麻「よつー勇一、何してんだ？」

勇一「あー当麻、……実はインデックスの私服を買ってあげようとしてたんだけどちょっとトラブルがあつてインデックスの下着を見てしまい、怒らせてしまったんだ」

すると当麻は俺の肩に両手を置いた。

当麻「お前も苦労してるんだな」

まあ当麻に比べたら少ない方だけだと思つていたらポケット
から着信メールが来た。内容は

インデックス「服着替えた」とのメールが

勇一「着替え終わつたか……そつだ当麻も一緒に見ていい」

当麻「そうだな……一応保護者になつてるからな」

てなわけで会つたばかりの当麻と一緒にインデックスの場所まで行
つた。

勇一「インデックス來たぞ」

俺が呼びかけると試着室のカーテンが開きインデックスの姿を見た。

インデックス「ど……どう?」

インデックスは顔を赤く照れているけど俺と当麻もインデックスの
可愛さに照れている（服のイメージはおまかせします）

当麻「可愛い……」

勇一「可愛い……可愛いよインデックス！」

インデックス「本当に！ありがとう ジヤ私これにする！」

買わせる気満々 だからといって断ればそこで子供のようだだこ
ねて面倒くさいことになるから、仕方なく買つことにする

インデックス「てか 当麻いたんだ！？」

当麻「ああ ちよつと会つてな」

さて値段と……！高！まじかよ！そんなにすんの！

勇一「と……当麻……これ」

当麻「ん……？、うぐつ……」

この値段は恐るべし高い

（値段の高さはおまかせします）

インデックス「？ どうしたの」

当麻「……ごめん、俺用事を思い出しても……」

俺は当麻が逃げるようだから手をつかんだ

勇一「当麻……ここまで逃げるなんてないよな～」

当麻「うぐぐぐ……はあ～不幸だ

とこいつで俺と当麻は結構高くて綺麗な服を買つことにした。本当に高すぎた……

そして帰り道

インデックスは嬉しそうに買つてもらつた服（入れ袋）を持つていた。

当麻「たくつ、俺まで巻き込むなよ」

勇一「ごめん、けど仕方ないんだ あ～ゆ～のは」

当麻ホントに「ごめん でも当麻の分があつたからこそ買えたんですけど

そして分かれ道

当麻「それじゃ 俺とインデックスは右側だから」

勇一「ああ 俺は左側と」

インデックス「勇一 今日はありがとうね、当麻も」

当麻「ふつ、い…いくぞ」

インデックス「勇一 バイバイ」

勇一「じゃあね」

俺は2人を手を振つて別れた。

勇一「さてと…… 所持金地獄の…始まりだ……ハツハツハツハ…」

END

とある魔術ルート（後書き）

原作と小説ミニラジオ放送局

2次「こんにちは 前回は はつきりと公式を言ってなかつたです
でも今回から正式に始めたいと思います まあ説明やなんやらか
は はぶいてゲスト呼びます。ではどうぞ」

当麻「どうも とある魔術からわたくし上条当麻と申します」

2次「ではさつそく質問です。上条さんはなんで女にモテるんです
か？」

観客からお ！

当麻「な！俺が知るかよ！」

2次「するい！インデックスや御坂さん、上条さんが知つてる周り
の女性からも上条さんに求めるじゃないか！」

当麻「知るか！俺は悪くないんだ ！」

2次「あ！逃げた！」当麻「もつ本当に不幸だ ！！」

2次「たくつ……まあこんなぐわいでやつていきますのでまた次
回会いましょう！」

Angel Beats!ルート（前書き）

Angel Beats! 完全まで長かった
上手く出来たかは毎回不安に思つてます

だが今回はAngel Beats!ファンにとって
指沢さんを出しました
では どうや

Angel Beats!ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・8話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

？「そのあんた！」

振り向くとそこには赤紫色の髪にリボン付きカチューシャの女の子がいた。なんかにやつとこっちを見ている

勇一「俺ですか？」

？「あんた以外誰がいるのよ」

勇一「ていうか あなたは誰ですか？」

？「私？私は仲村ゆり SSSの1人よ」勇一「SSS?なにそれ？」

ゆり「死んだ 世界 戦線、略してSSSよ」

勇一「死んだ 世界……つてすでに死んでんじゃん！」

ゆり「あ！間違えた、死んでない 世界 戦線だつたわ、なんか前にこんなのがあつたようなきがするわ」

勇一「なに勝つてに納得してんだよ！…」

全くどいつもこいつも俺がツツコまないときがすまないのかよ！ゆり「そんなことよりあんたをSSS団員に入れてあげるわ」

勇一「え！」

こうして俺は無理やりそのSSS団員とかに入ってしまった。
（部室）

俺は妙な部屋に入った、だがそこにはいるんなやつがいた。といつてもめちゃくちゃ人数が多い、長くなりそุดから簡単に教える。

SSS（死んでない 世界 戦線）メンバー

音無結弦 日向秀樹

この2人は俺をサポートしてくれるらしい

高松 野田 遊佐 藤巻 ＴＫ 松下護 駒 大山

この人達はいろいろとわからない人

竹山はテレビでみる平成 院のマスコットみたいだけど可愛く

ない

隅にいるのは椎名、なんかスカーフ的なをつけて「あさはかなり」と言つてる

あと学生帽をかぶつて生徒会にみえそつな直井文人

なんか偉そつにして自分は「神様だ、『ロッヂだ』とか名乗つてゐ

そして静かに音無の隣でゆりの話を聞いてる立華かなで なんか可愛い

この間 生徒会をやめたがまた復帰したといつ噂があるらしい 最後に俺を無理やり誘つた仲村ゆり

自分気取りでしかもリーダー、逆らつ者には罰を下されるとか

俺はぼーぜんと大きな部室を広く見ていた。

ゆり「あんた達 新入部員ファーストミッショントリニティをするわよ」
突然部屋暗くなり正面にモニターが映し出している、そこで大山が俺を気遣い日向の隣イスに座らせた。

日向「ファーストミッショントリニティって俺達初めてじゃないよな?」
ゆり「そう けどあんまり細かいことは気にするな!」

日向（本当だつたら気にするんだが!）

ゆり「なんせ 新入部員勇一君が入つてくれたんだもん」

俺は無理やり入られたんですけど!!

音無「それで俺達は何をするんだ?」

ゆり「ふつふつふ」 見て驚きなさい!、聞いて驚きなさい!、触つて驚きなさい!」

いや、触ることは出来ないから

ゆりが提案したのはモニターに表示されている

「G i r l s D e a d M o n s t e r」に入つてライブを盛り上げよー！」

えー！ライブ！

勇一「あんたらちやんと授業受けたんのー！？」

ゆり「当たり前じゃない、でなきやこにいる意味がないでしょ」

野田「で、俺達はどうすればいいんだ ゆりっぺ」

ゆり「それは後で教えるわ」

野田「だとよ！新入りさん！、ゆりっぺの作戦守らないとお前の首、落とすぞ！」

勇一「は…はー！」

先に なんで武器を持つてゐるの？ を聞きたかつたけど、野田の武器「ハルバー」を俺に向けているから言えなくなつた。てか言つたら怒られそう

そして作戦決行の日、俺はG i r l s D e a d M o n s t e r略してG i d e m oのメンバーとして一時的に入り、俺の役目はG i d e m oと一緒にライブを盛り上げること。てか てか てかなんでG i d e m oのメンバーにー？

（体育館）

勇一「は……初めてまして天川勇一です。よ……よろしくお願ひします」

岩沢「私がG i d e m oのリーダー岩沢まさみだ 担当はボーカル&リズムギターをやつてる、そしてG i d e m oのサブリーダでリーダギターひや子だ、」

ひや子「よろしく

岩沢「そんでもベースのしおりごとライブのみゆき」

しおり「よろしくね

みゆき「よろしくね

勇一「どうも、」

岩沢「あとはアシスタントの……」

ゴイ「ドオオオリヤヤ……、私G i d e m oのアシスタント

コイで　　す！　！」

岩沢と話しているとき体育館入口から赤ピンクの髪に若干テビルコスチームのはしゃぎ女の子が走ってきた。

岩沢「あ、コイ　来たんだ～」

コイ「はい！先輩！予定通りの時間にきました」

アシスタントのコイか～めちやくちやテンション高いな～

岩沢「というわけだ、話はゆりから聞いてる　お前は一時的G1deomoのメンバーで担当はサイドギターでもやつてもうおいつ

勇一「え　　！！俺もやるのかよ！～」

コイ「おい～このクソ新入り！岩沢先輩の命令は絶対なんだからな～！」

俺は結局やるはめになつた。とゆうかコイってやつなんか生意氣だな！

翌日から特訓の日が二日何日が続いた。

このG1deomo、軽音部に似てないか？だつてそうだろ～。ギターがありベースやドラム、あ！鍵盤がなかつたか～などと現を抜かしていた。

～屋上～

音無「なあ日向」

日向「どうした音無

音無「勇一　大丈夫かな～って

日向「大丈夫だろ　あいつはすぐ根は言わないだろ」

かなで「日向君の言つ通り　勇一君は頑張れる人だから

直井「そつです！音無さんが心配するほどでもないです。……（でも僕は音無さんを心配しますけど）

日向「立華と直井　いたのか～」

？「俺達もいるぜ！」

音無「藤巻 高松 大山 松下護驥 TK 野田 椎名 来てたのか！」

藤巻「あいつならやれるさ」

大山「僕達が出来ないことを」

高松「彼ならやつてくれるはずです」

松下「俺達は見守ることしかできない」

TK「Let's music！」

野田「新入りには興味はないがゆりっぺのためたからしかたがない」

椎名「あさはかなり～己自身で磨く」

日向「なんでお前らまでいるんだよ

！！

そしてライブ当日、生徒は体育館に集まっていた。なんで集まっているか？それは学校終了後に突然スピーカーから生徒会長かなでの声がしてみんなを体育館に呼んだ。

俺とG1dem0メンバーは舞台で最終チェックを始めた。岩沢先輩はボーカル、ユイがリズムギター、ひさ子先輩はリードギター、俺はサイドギター、しおりはベース、みゆきはドラムという配置になつた。準備万端、みんなに教えてくれたこの演奏無駄にしてたまるか！

そして幕が開き、拍手が一斉に鳴り響き生徒全員拍手を止めた。岩

沢先輩がマイクを持つてみんなに言った。

岩沢「みんな、今日は集まつてありがと、実はみんなに伝えたいことがある それは…………」

生徒全員は少し緊張が走る。

岩沢「それは、G1dem0がこの学園に復活するという宣言をする！！」

岩沢さんの言葉を聞いた生徒は大盛り上がりなつた。みんなの声援はライブみたいに喜んでいた。

岩沢「みんな、ありがとう 今日からG1dem0の活動を行うと

して演奏する 聞いてくれ「Crow Song」
曲が始まり生徒全員は大フィーバー！…………ところでなんで復活ライブなのか、それは、岩沢先輩とひさ子先輩がまだ中学のころ、昔G1dem0のメンバーが犯罪を犯した原因で3年間廃部になった、それをすごい生徒会メンバーが解決しわざか1年半で、しかも廃部だったG1dem0を復活させる力 恐るべし生徒会、この日は復活ライブを3時間演奏をやつた。

そして次の週 SSS部

俺は校長机と席に座つてゐるゆりに拳を力を込めて机を叩いて怒つた。

勇一「結局 俺のためのミッションじゃなくてG1dem0を復活させるためじやないか！」

ゆり「当たり前じやない、G1dem0を復活させ我がSSS部のため知らしめるのだから、良かつたじやないあなたもG1dem0も力に加わつたんだし」

竹山「全く人騒がせな人です」

勇一「何もしてないメガネ野郎が言つな！」

竹山「メガネ野郎ではありますん 僕のことをクライシ……
ゆり「はいはい、以上もちまして今日のところ終了」
ゆりは立つて俺を通り過ぎて部室から出でつた。

竹山「では僕はこれにて失礼」

勇一「はあ」

俺はため息をつき部室を出た。全くゆりは本当に血口中だろ、
？「別にいいじやないか」

勇一「ん？音無

音無「だつて俺達はただ見物で見守ることが役目だつたんだし、まだお前の方がいいぜ」

勇一「うへへ確かに G1dem0を復活出来たのは俺も嬉しいん
だけど」

音無「なら、ゆつのことは気にするな」

そつと廊下にいた音無は俺に顔を向け去つて行った。

そしてとある廊下にて

俺が廊下を歩いていると後ろから話かけられた

かなで「あ、勇一君」

勇一「お！かなで　ずいぶん重そうな資料持つていろけど手伝おうか？」

勇一「そうか～」

かなで「あのね　勇一君、」

なんか頑張って資料持つてるかなでは可愛いな

かなで「この前はお疲れさま」

勇一「？…あ、ああ　ありがと～」

かなで「では勇一君、また…………後で」

勇一「おう～？」

かなで……今何か伝えたがつたきがするけど気のせいいか
結局俺はまた歩きそのまま帰つた。

END

Angel Beats!ルート(後書き)

2次「小説ミニラジオ放送局」

2次「なんか毎回 名前変わっているきがするが 内容は全部一緒に
さ、今回のゲストAngel Beats!からかなでさんです」
かなで「こんにちは 鮎さん」

2次「キタ ! ! () かなでマジ天使!・佐天さんマジ佐天使
かなで「佐天使?」

2次「う ! ! 」はあつ ! ! 何でもない、ではさつそく数枚のハガ
キを紹介しますか

かなで「楽しみ」

2次「ペニネーム・キリリンシ……」はあつ ! !
かなで「大丈夫?」

2次「すまん 取り乱した、内容は『イヤッホ ! キタキタキタ
キタキタ かなでちゃんマジ天使! ! 一度でも誰よりもかなでち
ゃんに会いたい! でなきやマジ殺す!』ってただの要望じやねえか
! しかも最後には反逆者になつてるし…」

かなで「私のためにハガキを書いてくれる人がいるなんて、私嬉し
い」

2次「あんまり誤解しない方が身の安全だと思つけど…… ところ
でかなでは音無と付き合つてゐるの?」

かなで「ガーデスキルハンドソニックバージョン1」

2次「きやあああ ! !」

かなで「結弦とはまだ付き合つてないわ」

2次「『』……ごめんなさい! 、もうこの話題には触れませんから
許して下さい!」 かなで「もう……恥ずかしい」

2次「収めてくれましたか…… 僕の命がSSSS(死んだ 世

界 戦前)に行く前に早くこの場を閉めよつ..... ではまた次回
は「生徒会の一存×コラボ作品」
次が最後のルートなのでお楽しみ
かなで「また会いましょう」

生徒会の一存 + 生徒会長ルート（前書き）

どうも 2次元美少女っしょです
いよいよルート版も最終回 長かつたな～初めの考えと今の考えは
違っていて自分でもすごいと思います
ではルート版最終回 4・9話どうぞ

生徒会の一存 + 生徒会長ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・9話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

？「ねえ、もしかして勇一君？」

俺は振り向くとそこにはだてメガネぽいメガネをかけていて資料的な物を抱き抱えていた女性

勇一「ん？あれ！和ちゃんじゃないか」

和「お久しぶりね勇一君」

勇一「お、今日はどうしたの？」

和「あのね、勇一君に頼みがあるんだけどいいかしら？」

まさか和ちゃんが俺に頼みがあるとは珍しいな

勇一「いいよ、俺で良ければ」

俺の力を必要していいる人がいればその人に手を差し伸べたいくらいだ

和「実はうちの生徒会の1人が休んじやつて人数が足りないの」

勇一「まさかそれって、俺が代わりに出ろってこと？」

和「あら、察しがいいわね それじゃ お願い出来るかしら？」

勇一「まあ和ちゃんのお願いならやつてあげるよ」

和「本当に！？ 助かるわ、じゃさつそく行きましょう」

俺は和ちゃんと一緒に生徒会室に行つた。生徒会室に入る前、俺は生徒会のイメージを想像した。

多分、賢くて頭が冴えてるし、和ちゃんみたいな人がいるかもしね
ないと思つた。

廊下を歩いて5分後、やつと生徒会室、和ちゃんが戸を開き中に入

つた。後に続いて

和「みんな、代理連れて来たわよ

その中には.....

読書をしてる生徒会副会長・椎名深夏とPSPゲームを夢中でして
る生徒会会計・椎名真冬、この2人は姉妹らしい 姉が深夏で妹が
真冬

そしてなんかまじめに話合つてている生徒会書記赤葉知弦と見覚えが
ある2人、白髪で天使のような可愛さと1人だけ生徒会帽を被つて
えらそうな雰囲気をしてる..... そう

立華かなで（天使ちゃん）と直井文人と、

小学生みたいな人、一応生徒会長の桜野くりむが副会長杉崎鍵にだ
だつてている姿を見た。

勇一「和ちゃん、俺一回出ていいかな？」

和「え？ 別にかまわないけど」

俺は外に出て一回改めてまた入る、すると

勇一（やつぱり何にも変わらねーーー）

やはりこれが現実だつた

和「みんな、今日の代理は勇一君だからしつかりお願ひね」

くりむ「では今日の議題『夏に向けて大人の魅力を作り出そう！』」「
くりむがあーだこーだ言つてている間、俺はかなでと直井とこつそり
話すことにした。

勇一「また、会つたね 生徒会どんなん？」かなで「特になにも く
りむちゃんが可愛いくて面白い」

直井「たがやつ・杉崎には気をつけろ 杉崎の女子目には恐ろしい
力が」

杉崎「ちょっと 聞こえますよ 」

くりむ「言つからにして大人への道と言つのはね..... ちょ

つとその3人なにこつそり話してんの！」

直井「小学生が何を言つている（笑）」

くりむ「私は小学生じゃない！立派な高校生なんだよ」

勇一「高校生の割りには背が低くないか？」

俺と直井はくりむの禁止ワールドを言つてしまつた。そしたら

くりむ「う、うえーん 知弦ー直井と勇一が身長のことば力にする」

知弦「はーいよしよし、赤ちゃんはそのままの方がずっと可憐いわよ」

くりむ「それ、フォローになつてないよ」

くりむは泣きな目で助けを求めていたがどうやら違つていた。

知弦「直井君、勇一君、赤ちゃんはね中学の頃からずつーーと伸びない人生を送つているのよー！」

くりむ「やつぱりフォローになつてないよー！」

深夏「とゆうより今日の会議はテーマを決めるはずじゃなかつける？」
深夏が本を読み終わつた後、本題に戻した。そして深夏の疑問は真冬に回した。

真冬「はい、真鍋先輩が提案したんですけど、あの人はあれだと

……

真冬があの人は達と指摘する人、杉崎やくりむ、知弦さんや直井と俺を含んだ人達だろ

和「全く 話しを聞く耳持たないわねー」

和ちゃんが席から立ちくりむの横に行つた。

和「はーいみんな聞いて、今日は夏に向けて生徒全員が涼しくなるテーマを考えていきたいと思います。中身の方はまた改めて教えるわ、勇一君は今日代理だからテーマだけ考えればいいわ」

勇一「わかつた」

さつきまでごじやごじやだつた生徒会室が落ち着いた雰囲気になつた、さすが和ちゃんやるねー！

だがせつかく和ちゃんが作り出した生徒会雰囲気がこの後崩れてい
くことになる

和「では個人のテーマを発表してください　挙手をお願いします」

杉崎「はい！」

和「はい、杉崎君」

杉崎「涼しくなるテーマそれは、みんなで水着に着替えよう！（女
子限定）」

深夏「なつ！そんなことが出るか！だいたいなんで女子限定なん
だよ！…」

くじむ「そうだよ杉崎！そんなの却下だよ！」

杉崎「何言つてるんですか！女子は水着を着ることでより美しくな
るのさつ…」

和「そ、それはちょっと…」

勇一「水着つてスク ミズ？」

杉崎「確かにスクミズもいいけどやつぱりビキニ水着の方がベスト
！」

深夏「ふざげんな　…」

深夏のハイキックが杉崎の顔にヒットし

杉崎「ぐはあああああ！」

後ろの方まで飛んだ。

和「あははは……（笑）確かに不採用だわ、それじゃ次の挙手の
方どうぞ」

かなで「はい、」

和「はい、立華さん」

かなで「夏場は暑いと思うので、冷やしタオルや水筒など持つて来
るのはどうかしら？」

おー・まともな考えが出てきたぞ

くじむ「さつすが！かなでちゃん、杉崎とは大違い」

直井「僕もかなで会長さんに賛成です」

真冬「それはとてもいい案ですね」

和「ではまず候補としてあげましょ」

和がノートに候補を書き始めた。ノートには「立華かなで 冷やし タオル、水筒」って書いてあるのをちょっと見た。

和「では他に挙手を」

真冬「では私の番ですね」

真冬ちゃんが手をあげて立つた

真冬「私の案はまず杉崎先輩が愛人である中田黒先輩と……」

杉崎「やめて 真冬ちゃん！」

勇一「『めん真冬ちゃん、それってBL思考に入ってるから無理だ

と思つ』

真冬「え……これからまだまだ杉崎先輩と中田黒先輩があんなことや（やめて……）こんなことの（俺のハートのガラスが……）続きがあるんです！」

深夏「真冬、それ以上に言つのはやめなさい」

和「まあ……そういうのは女子しか耳にいかないわね」

知弦「ては私の番ね」

深夏が真冬のBLの話を切り止め、その後に知弦が案を出しにでた。

知弦「私が出すのはそうね、赤ちゃんかしら」

くりむ「え？ 私？」

知弦「赤ちゃんを可愛いスクミズに着せて夏のイメージキャラクターとしてみんなに癒やしていくよ～ね～赤ちゃん」

くりむ「あ～ん／＼知弦やめてよ～」

知弦「もきゅ～？」

なつ！なんだ今のもきゅ～って一コ一〇一アップなのか！
と俺は親の田のよつに生徒会みんなをみていた。

和「そうえば勇一君は何か案はあるのかしら？」

勇一「え！俺？ 俺はいいよ 全然当てにならないし」

くりむ「そんなこと言わずに」

深夏「教えてなさいよ」

和ちゃんの一言から言われて、みんなが見てきた。

勇一「それじゃ……………扇風機やクーラーとかつけたらいいんじゃないかな？」

和「扇風機とクーラーね、まあ一応候補としてあげとくわ」

深夏「なんだ いたつて普通じゃん」

くりむ「な、だ、つまんない」

俺に何を求めているんだ！？

とそんなことを思っているが生徒会も楽しめるところもあるんだな、イメージ的には雑談みたいに会話があるけど この生徒会は違う、この生徒会は

くりむ「それじゃ 今日は」の辺でお開きといつことでいつものあれで閉めよ

違う「そうね」

深夏「もう帰る時間だし」

真冬「やりましょ、かなでちゃんとも」

かなで「わ……私も？」

くりむ「せ のつ」

くりむ・知弦・深夏・真冬・かなで「「今日の生徒会 これにて終了！」」

5人が同じポーズをして、なんか可愛い

俺は今日の生徒会代理終え、みんなと別れ 生徒会室を後にし帰ることにした。すると掲示板に金髪の生徒女子がいた。彼女はまた新しい広告を貼つている。

勇一「何やつてんだリリシア」

リリシア「あら、勇一君 今新しい記事を張り終えたところよ」

リリシアは毎回記事をよく更新している。今だつて新しい記事を貼つたんだから、え、と内容は「大発見！生徒会室に変態男子副会長とBL好き会計とナルシスト副会長男子と子供がいた！！！」

リリシア「これで生徒会の評判ががた落ちだわ
一体 生徒会をどうしようとするだ〜〜? 嘘然と掲示板を見て思
つた。

勇一「それじゃね リリシア」

リリシア「ええ、では」

リリシアと別れようやく家に帰ることに出来た。

勇一「にしても変わった生徒会があつたもんだな〜」

END

小説版ラジオ放送局！

2次「は～い こんちは、この作者2次元美少女っしょです 今回で第3回目です。さて次のゲストは誰かお呼びいたしましょう 生徒会の一存からこの人です、なにげに生徒会長 桜野くりむさん くりむ「ちょっと！なにげには失礼でしょ！！」

2次「いや～だつてこんなに小さくて可愛い女の子が生徒会長なわけがないじゃん」

くりむ「それって褒めてるの？バカにしての？」

2次「どっちでもよくなくなない？」

くりむ「なにその言い方」

2次「ではおはがきコーナー いろんなコーナー作者からハガキとして読んでいきたいと思いますけど、届いたのは1枚だけ」 くりむ「ではさっそく読もう」

2次「OK ではハガキ1枚からペンネーム「天使ちゃんは俺の嫁 異論は認めない」さんから…… つて自分だけの物にするなよ、

「こんちは勇一君、2次元先生

さつそくですが内容…ゴホン

自分はやつぱりAngel Beatsですね そしてAngel Beatsといえば天使ちゃんこと奏さん！ あの子は可愛過ぎですよ！ 何あの可愛さ…俺を萌え殺したいんですかね？ でも音無くん誘われてSSSMメンバーと分かり合えて…良かつたな…つと言いたいことはまだありますが…またいつの日か と言つわけで天使ちゃん、コリッペをorder お願いします あ、出来れば直井さんに一言「僕は神だ」と言って下さい

…ですか～～お！天の神から手紙が来た」

くりむ「え？ 何々」

2次「まずはコリッペさんから、一言紙に書いてある 「あたしを応援するんだつたらSSS団に入りなさい！」 と、かなでさんから「いつも 応援ありがとう 私からは大好きな激辛マーボー豆腐を送るわ」

あと直井さんからもある「僕は神だ」 本当に一言だ。

まあなんだ楽しく行こうぜ

くりむ「なによそれ」

2次「ではみなさん次回はけよつとお休みです 次はDOGDAY'Sです ではみなさんDOGDAY'Sで会いましょう」

夏の外出旅行（前書き）

いつも 2次元でーす

「俺の姉妹達の憂鬱」久しぶりに更新です

今回は夏休みなので夏休み編を書いていきます

前回の話とは一気に飛びますので

要注意です

夏の外出旅行

「俺の姉妹達の憂鬱 5話」

青空に輝く 灼熱の太陽に晴天の霹靂 こんな蒸し暑い時期になつたもんだ！」

春の4月、普通の5月、梅雨の6月、夏始めの7月、そして夏本番で夏休みの8月

今俺はここにいる！ というのも俺達天川家は海辺の別荘に居て、海で遊んでるんだ。3年の涙ねえ、1年の梓と希、そして今はここにはいないけど2年の桐乃、桐乃是ティーン誌のモデルをやつてて外出中

ある意味つらいよ 3人の姉妹と1人の女の子を相手にしないといけないのだから、それにしても彼女達の水着がまぶしい

涙「ん？ 勇一なにしてんの」

梓「お兄ちゃんも早く遊ぼうよ」

希「…………こくこく

勇「はいはい、すぐ行くつて」

これは幸福か不幸かは彼女達次第できまるな～

梓「ねえ 桐乃お姉ちゃんはいつ頃こっちにくるの？」

妹・梓は俺に桐乃のことを問い合わせ始めた

勇「ん～だいたい夕飯の頃にはくると思うし迎えはあっちの方でしてくれるし」

涙「なるほどね、桐乃ちゃんはきっとスター・モデルになれると思うよ」

希「桐乃のスタイル いい」

梓「桐乃お姉ちゃんがこっちに来るまで長いな～」

勇（俺は姉妹達の相手をしなくてはならないのか～！）

梓が言つてることとは違つ思いを言つた。

涙「それじゃ 今から遊びますか！～！」

梓・希「おーーー！」

勇「お～～」

言い忘れてたんだが俺達がどうしてここにいるのかと言つと

先週、涙ねえと一緒に近くのスーパーに行つた。そして買い物をしてくじ引き券をもらつた。10枚、つていつから集めてたんだ？

それでくじ引き券を持つて抽選会に行つて涙ねえがガラポンを回した。5回分やつたらティッシュばかり、でもそれから6回目は5等の商品券5,000分、7回目は4等のBBQ^{バーベキュー}、8回目、9回目はまたティッシュ、そして10回目で2等の海辺の別荘貸し切り旅行（家族のみ）2泊3日の券を手にした。涙ねえは強運！？

といつたぐわいに俺達はここにいる。涙ねえが当たた商品はみなこの旅行の分としてつかわれるのを

夕方16時～

涙「ん～！ だいぶ遊んだ～！」

梓「海で遊んでいるとなんだか疲れますね」

勇「確かにそうだな」

希「でも楽しかった」

勇「それもそうだな」

まあ夏の思い出は一つや二つあってもいいくらいだな、これも涙ねえのおかげだし

涙「梓ちゃん どうしたの？」

梓「どうしたのって、何が？」

涙「梓ちゃん どうしたの？」

梓「どうしたのって、何が？」

希「梓 真っ黒」

梓「え？……ええ
！」

勇「確かに真っ黒 と言つことは真っ黒になるほど遊んだつてこと
すげーな 梓が着てる水着以外の皮膚が焼けてるし 焦げ茶色を
してゐ

梓「別にいいじゃないですか！？」

涙「と言つことはあれだね 焦げにやんだね」
涙ねえ、俺が思つたことを言いやがつた！

梓「なんですか！焦げにやんつて！」

涙「あはつ 焦げにやんが怒つた」

梓「も――にや――！」

涙「きや―― 助けて！」

涙ねえが梓に追わされて逃げていく

浜辺に残つた俺と希、「これからどうするかと言つと

希「勇一 ちょっと来て」

勇「え？何？どこへ行くの？」

希は俺の手を掴み、希が向かう場所へ連れていかれた。

(――からは読んでる人の想像にお任せします)

帰宅後 僕と希は別荘の玄関に帰つていた。涙ねえと梓は先に帰つてたり着替えをしてたりしてゐた。着替えてないのは俺と希だけ

勇「ただいま」

涙「おかえり 遅かつたけど何してたの？」

勇「え！ 別に何も ただその辺をぶらりと」

希「ぶらりと」

涙「ふーん じゃ2共、はやくシャワーを浴びて服にしかえて夕飯

作るんだから

勇「わかつたよ」

希「りょーかい」

涙ねえは俺と希をおいて台所へと行つた

勇「それじゃ 浴びるか 希先浴びてこい」 希「いいの?」

勇「ああ 俺は外のシャワーで浴びて来るから」

希「ありがとう 勇一」

希はそのまま上がり浴室に行つた。俺は玄関を出て外に出てシャワーがある個室に向かうと、後ろから追いかけ来る人がいた。

梓「お兄ちゃん」

勇「ん? 梓! ?」

追いかけ来たのは梓だった、しかも手に持つてるのは衣服

勇「どうしたんだ? 梓 こんなところで?」 梓「はい 着替え」

勇「着替えって まさか梓はこの服を」

梓「そうだよ お兄ちゃん寒そうに帰つて来そุดから風邪引かな

いように服持つて來たよ。後 タオルも」

勇「おお、ありがとうな梓」

梓「どういたしまして じゃ帰るね」

勇「ああ……」

梓は衣服とタオルを俺に渡して來た道を戻つて帰つた。

あつ……待つてくれないのか

俺は少し悲しく思った。

シャワー浴びた後、タオルで体を拭き、俺は梓からもらつた服に着替え外に出た。もちろんカイパンを持って帰つているが、

勇「あ! 夕日が沈みかけてる と言つことはもうそんな時間か? 早

いな～」

夕日を見ながらそつと言つた。そして正面を向いて歩く すると俺達の別荘の奥の道路上に止めている車を見た。その車から黄色髪をした人が出てきた

勇「あれ？ もしかして桐乃かな、だとしたら迎えに行かないとな
俺は急いで黄色髪の人のとこへ軽く走りながら向かった

TO be continue!

夏の外出旅行（後書き）

いかがだつたでしょうか？

初めての天川家外出旅行

佐天さん（涙子）の強運がすごい！

あ～早く竹達彩奈がやつてるキャラ（非現実にいるキャラ）をだし
たいな）

というわけで

意見や感想をずっと待っていますので

よろしく

ラウラ＆シャルさん 感想ありがとうございます、他のコーナーもありがとうございます

姉妹の夕日・日和（前書き）

どうも2次元です
いよいよ桐乃が来ます
でも今後の展開はどういっていいのか未定です
今回の進行は夕方～明日まで
とのながれ 十分楽しんでください

姉妹の夕日・日和

「俺の姉妹達の憂鬱 6話」「

？「本当にここでいいのかい？」

桐「はい ありがと「ひざ」ぞいます、もつすぐ着くので後は歩いて行きます」

？「桐乃、別に無理しなくてもいいんだよ？」

桐「無理なんかしていってば あやせ」

勇「おーい おーい」俺は桐乃らしき人を見つけ声をかけた

桐「ちつ あのバカ！」

あれ？今なにか聞こえたような

勇「やつぱり桐乃だつたんだ」

桐「なんで勇一がここにいるの？」

勇「いやや悪いのかよ！」

桐「あんたは家で留守番じやなかつたけ？」

勇「俺は飼い犬じやね！ちゃんと涙ねえ達と来てるよーーー！」

桐「ふーん まつ別にいいけど

たくつ でもこれが桐乃というイメージを持つてしまつた俺 暴言
を言つ兄姉つてなんかいやだな」

あやせ「ねえ桐乃 この人は？」

あやせはマネージャーの車から降りて桐乃の近くによつた

桐「ああー こいつはあたしの兄姉で勇一」

勇「初めてまして 天川勇一です」

あやせ「私は 新垣あやせです。いつも桐乃がお世話になつてます

私と桐乃是モデル活動をしてるんです

勇「ああ～そのことはだいたい知ってるよ

あやせ「そうですか」ではこれからよろしくお願ひします

勇「いじりがいそ

あやせ「それじゃ桐乃 また今度で

桐「うん、また

マネージャー「では桐乃さん 予定の連絡が入り次第電話で伝えるから

桐「はい、わかりました

あやせを乗せたマネージャーの車は来た道を戻つて行き、その車は遠くへと消えて行つた。

桐「んじゅ 勇一、涙ねえ達がいる別荘まで案内して

勇「ちょっとは言葉の聞き方直した方がいいよ！？」

桐「うつさい！ 早く案内しろって！！

やれやれ どうして俺だけこんななんか

俺はあやせと別れた場所から涙ねえ達がいる別荘まで案内をした。そして涙ねえ達がいる別荘

（玄関）

勇「ただいま

涙「もう勇一！ また遅く……って桐乃ちゃんじゅない！？」

桐「た、ただいま

涙「いつこにに来たの？」

桐「ついさっき 勇一が迎えに来たから

涙「それでまた遅くなつたわけか

勇「そうゆうこと

涙「なら仕方がないか」さつ一人とも上がって上がって

俺と桐乃是涙ねえに言われて上がる、そして上がつたすぐ近くの扉

を涙ねえが開けた。そのさきは3歩進んだところにテーブルがあつて食品がテーブル全体を埋め尽くすほど大量に置いてあつた。

涙子・梓・希「じや／＼ん！－！」

桐乃・俺「おお――！」

涙「勇一があまりにも遅いから先作つちやつたから！」

勇一す、すまね一涙ねえ」

梓「さつ早く食べよう」

木は俺と木刀の扇を持てて語りて云ふ所にいたせぬかそいつ

その後 食事を終え皿を片づける5人、

桐一 さてと、じや涙ねえ
あたしシャワー浴びるね？」

木ノ内 滋 氏

いし

桐一 ちよつと涙ねえ！やめてってば！」

源氏物語
木刀に一絶活字口合一得力一上口活字口列力
卷二辛酉年二月二日

勇一をどうしますか?」

卷之三

勇「そ、それは面白ない、じゃ俺と梓は皿洗いするから希はテープ

ルの回りを掃除してくれ

希ニシナガタ

梓「はーい お兄ちゃん

こうして俺&梓と希で分かれた。

～キッチン～

梓「お兄ちゃん、ちょっと聞いていい？」

勇「ん?別に構わんが」

俺は食べ終えた皿を先に、
様子をうながす。それじゃ、

俺は食べ終えた皿やお椀を洗い、それを梓がタオル布巾で拭くといふ感じで話しながら喋る

梓「お兄ちゃんは好きな人いる？」

勇「ぶつ——つ——！」

木は一休僧を取るがいんが、一発言するにキはとがある

勇「い、いきなり何を！？」

梓「だつて……お兄ちゃん……その年になつても好意……を持つてないし……」

梓、俺は梓を含んだ家族みんなが好きなんだ。でも好意として好き
なのは涙ねえと桐乃と梓と希って、そんなことはまだ言える訳がな
いんだ

勇「し、心配するな!!」、少しずれ好きな人ができる教えるからだ

梓「本当に？」

梓の目は疑問の目だつた

勇「本當、本當」

梓「じゃ その時は桐乃お姉ちゃんと一緒に自状させてあげるから
あははは…… 梓は外見が可愛くても、中身は悪魔だね

俺は顔を笑顔でひきつた。
そして皿洗いが終り、キッチンから離れた。

勇「ふう〜、終わった」

梓「それじゃ私は部屋に行くから」

勇「おう」「う」

そつ言つて梓は階段を上がつて2階の個室部屋に入つて行つた。

勇「んで希はまだ続いてんだ?」「うん」

あれから数分も経つてまだちつとも止まつてない俺と話たいからわざと遅くしたつもりなんだろうか?

勇「希 わざとちつてるだろ?」「うん」

希「わざとなんてしてない ちゃんと掃除してみる にしても希の掃除エプロンはよく似合つてるな~(服装は個人の想像にお任せします)

勇「まあ別に してるならいいけど、希 話すことはあるだろ?」「うん」

勇「そ」「う」

そつきまでの希はテーブルの片付けしていく、今は床のゴミを集めで掃いてる。俺は希が掃いてるゴミを集め終えるまで待つていた。

希「別にない」

勇「がくつ! ないのかよつ!」「うん」

そこは釣られて話すんじゃないの!?

勇「本当に話すことはないのか?」「うん」

希「ない」「うん」

一瞬希が笑つたように見えたが俺は気づかなかつた。俺は一緒に掃除を終わらせ先き俺用の個室部屋に入つてベットに寝て明日を迎えた。涙ねえと桐乃是浴室から上がり希と話し、それから

各部屋別で寝ることにした。

今、じろ梓も寝てる時間だろ、

勇「はあ、今日は疲れたな~」

今日一言を言って……寝た。

TO be continue

いかがだつたでしょうか？

あやつちのキャラの口数が多いです まあ好きなんだ
そして俺妹のキャラ あやせ登場

出番は少ないけど桐乃の近くにいる友達、あー表の友達で
なんだかあやつちのキャラを出したくなつてきました。

あこ、美春、美緒・・・・・・あれ？現実にいるあやつちのキャラ
ラが出てこない・・・

というわけで、すいませんけど

この小説に似合いそうなあやつちのキャラを教えてください。梓と
希と桐乃は出ているのでそれ以外現実にいるキャラ（非現実キャラ・
エクレールなどはNG）お願いします

感想や意見お願いします

人生の夏休み（前書き）

どうも2次元です

いよいよ今回で夏休み編は終わりです

なんと早くも夏休みはおわりとは自分でも今は夏休みもいいですけど秋の行事がやりたくて早く負われせました

まあまず読んでいくください

人生の夏休み

「俺の姉妹達の憂鬱
7話」

明日の朝を迎える前に軽い事件が起きた。それは俺がまだ寝ている時のこと、

勇むにせむにせむにせむにせむにせ

静かに睡眠してゐ俺、すると俺の部屋から誰かが入ってきた。」「そりと、俺のところに近づいて来た。ゆつくつとベットにあがりそして、

バシイツ！！！

勇 - 廿二 - 九

いきなりほほを叩かれ、俺の上にまたがつて居るのはなんど、妹でも妹でもない、ほぼ同年である桐乃だった。

勇一 なんでお前がここに！？

洞「ちよつと話しがあるから来て」

桐 ちーと語があるから来て」
桐 乃も小さく声で話してきた。

勇一話して明田じや駄田なのか？」

「…………」

どうゆうことだ！？ あの桐乃が俺に話しがあるとは、今まで頼ま

れ”とは何回があるがどれもくなことはない、

桐「さつ早く来て！！」

勇「わーかつたって」

というわけで桐乃が自分の部屋に行つた後、俺も仕方なく桐乃の部屋へと行つた。

桐乃の部屋はいたつて女の子が飾りそなものがいっぱいあって感心する。

桐「あんまじろじろ見ないでくれる！」

勇「見てねえよ！ それで話しつてなんだ？」

桐「実は……」

勇「実は……」

桐「人生相談があるの！？」

勇「人生相談！？ お前！ 深刻な問題でもあるのか！？」

桐「ち……違うわよ！ バカ！！ あんたに渡したいものがあるの」
そういうつて桐乃是キャリーケースから何かを取り出した。それは少し小さめで長四角形の箱を渡された。

桐「これ、あいつに渡しておいて」

勇「あいつって誰？」

桐「あいつのことなことに紙がついてあるから、けど箱は開けちゃ駄目だから！」

勇「なんで！？」

桐「紙に書いてあるキーワードでその時に開けて渡して、私の話しあはそれだけ」

勇「そんだけかよ！」

桐「ぐずぐず言わない！ ちゃんと守りなさいよ！ でないとあんたを殺す！ いいな！」

勇「はいっ！」

俺は桐乃から預かった箱を持って部屋に戻りに帰った。
そして箱は机に置きすぐさまベットについた。

勇「つたく！ 可愛くねえ！」

最後の一言を言つてまた寝ることにした。

そして今日の朝、俺は普段に起きた。昨日桐乃から預かった箱を確認するため机をみた。

机の上に少し小さめの四角形、うん、夢じゃなかつたはあゝ 夢だつたらいいのに

俺が起きて下に降りると涙ねえ達が朝ご飯を作つていた。

朝食それとなく食べていた。

朝はどうしてるかというと

朝はしつかりともう勉強

苦手勉強 英語・俺は日本人なのになぜペラペラ英語なのか国語は難しい、理解とか内容把握しろとかありえない！

その代わり得意分野は数学や実技体育

まあこの程度は楽勝

昼はまたもや家族みんなで海水浴

またもや涙ねえと桐乃と梓と希の水着がまぶしい

その後、桐乃にはひどく怒られたんだけど

その日の夕方＆夜

早いうちに夕食を終え、2泊3日の最後の夜は花火をすることにした。

涙「よし、花火するよ！」

涙ねえが花火セットを持ってみんなを呼んだ。

一家集まり浜辺へと来た。

それぞれ花火を持ち、鉄皿についてあるロウソクの火につけ花火の光を灯した。

梓「綺麗だね～」

希「綺麗」

勇「そうだね～花火つて夜だと輝いてるね、……………にしても夏休みも残りわずかしかないのか～時が進むの早いな～」

涙「しようがないじやん、夏休みだもん」

桐「涙ねえの言う通り！我慢しろ！」

またもや桐乃に怒鳴られた。本当に可愛くねえ！

梓「お兄ちゃん、しようがないよ ほら花火つてこんなに綺麗だよ」

勇「梓…… そうだな贅沢言えんな～」

こつして2日目の夜は終わり、3日目の朝にはすぐ帰ることにした。俺にとつては長いようで短い夏休みだったことは忘れない、ましてや涙ねえが当選またはくじなんかゆろうとしなかつたらこんな思い出に残る楽しさはなかつたと思つ

俺は当然のようになつて思つっていた。

おまけ

帰宅途中の電車の中、座席で座つていた天川家、俺と涙ねえはあんに疲れがあるといつのに体や意識は元気、梓は涙ねえの肩で添い寝をして希は涙ねえの膝で添い寝している。まるで涙ねえが母さんみたいだな～

と笑顔で見ていた。

すると突然、俺の肩に桐乃が添い寝つて來た。よく見ていると添い

寝の桐乃是意外と可愛い

桐「ん〜〜勇一……」

おー俺のことでいい夢でも見てるのか?

桐「キモ……ロリコン……」

あははは……ひどく言われよう……だな……

俺達が乗ってる電車は次の駅まで走り続けた。

TO be continue

人生の夏休み（後書き）

というわけで夏休み編は終わりで9月からは秋の行事を1ヶ月ずつ
頑張つて行こうと思います
では次回会いましょう
ラウラ & amp; シヤルさん、コイにゃんさん感想ありがとうございます。
引き続き感想お願いします

新学期の騒動（前書き）

いつも2次元です いよいよ2学期／後期が始まりました。
今回はドタバタから始まります

新学期の騒動

「俺の姉妹達の憂鬱 8話」

今月の9月は涼しく居られるはずだったのに今は……

勇「暑い……9月もこんなに暑いなんてまだ夏休み明けはしないのか……？」

俺は長いようで短い夏休みが終わっていると思つたがそれは間違えなかかもしれない、地球の環境がずれていて決まった季節が全然違つて……

梓「お兄ちゃん、何難しい顔してるの？」

勇「え！……いや、別に」

梓いたんだ、多分俺を見つけたんだと思う
そして梓は突然

梓「お兄ちゃん、私ここからは別の友達と登校するから先行くな。」

勇「ああ わかった」

梓はそのまま真っ直ぐに突つ走つて行つてた
さて、おれも行きますか

15分後、ようやく俺達天川家が通う THE World X 高
等学園ついた。

玄関で靴を上履きに履き替えて上がつた。すると右側から誰かが走つてきた。ものすごい勢いで、よく見たら……

？「勇一……一……様……」

勇「ん？誰だ？」

？「勇一様」

「……………げ！…あいつけ…！」

そう俺はよく知っている人物、毎回毎回

ナリ的（あし）には勝てては思っていないか

？——「勇一樣——！」

勇者……お姉さん！？

四庫全書

卷之六

乙姫に殴られて3メートルぐらい飛ばされて廊下に倒れ

（ちなみに乙姫が殴った場所は俺の顔の左頬）

勇一「いたたたたあゝ、何すんの！？」

この何うか、おうせんとおじて和は通じてくれ

あ！ そういう夏休み中乙姫に連絡いれてなかつたんだ！ 家族旅

呼ぶのを忘れてたんだ ゆるしてくれ!」

乙姫のせ一縦文に怒りてるよ！

乙「勇一様がそこまでしてくれているなら、勇一様、私は怒

つたりしてませんよ」

勇・々! 本當に!?

乙姫が怒つてない！？ということは……………天使の女神♪

乙「その代わり、勇一様の隣にズートといますから」
バートナー

なんだかんだ言つて墮天使じゃないか……

そんなこんなで俺と乙姫の軽い事件から数分後、朝S H Rが始まつた。しかもこのクラスの担任が鉄人こと西村先生だつた！

西「お前ら 急な話で悪いが…………」

鉄人が言つことはいつもハードだよ

西「今月末に球技体育祭を行う！！」

クラス一同「え――――――――！」

球技体育祭つてあの地獄の祭りだよね！？

別名・デスマッチランド

朝から夕日が沈むまでのあの地獄の戦い！！

西「よつて3、4週間練習を行う！！お前ら気合い入れておけ！！そして鉄人があの言葉を宣言してから数時間が経つて放課後の帰り、

勇「はあ～いやだな～」

枯渴「確かに厳しいよな～なんせ男子達が主役だからな～きっと女子はあんまりやらないからな」

乙「お二人はいいコンビでしたわね」

勇「まあ～な 息が合えば最高だし、」

枯渴「息が悪かつたら最悪だし どっちもどっちだからな」

乙「ではわたくし、お二人を応援するために頑張つて作ります」

枯渴「作るつてなにを？」

乙「それはひ・み・つ」

乙姫は嬉しそうに俺達を置いて帰つて行つた。

枯渴「なんだろか？」

勇「さあ～ それじゃ俺達もさつさと帰つて明日の授業の準備をするか」

枯渴「了解 ジャあな」

俺と枯渴は明日に備えてそれぞれ自分の家へと帰つて行つた。

TO be continue

新学期の騒動（後書き）

これから忙しく書いていくつもりです
1ヶ月は球技体育祭を書きまくるのでは
なにかアイデアをお願いします

次回も楽しみにしてください

前回のウウラ & あまちゃん、トイにやんさん
といひわこま。弓を続き感想お願いします

感想ありがとうございます

2年Bクラス表設定（前書き）

こんには

球技体育祭に向けて今回Bクラスを詳細しました
あとキャラが分からぬ人のためにタイトルも付けました
ちょっとしたフル豪華です

2年Bクラス表設定

「俺の姉妹達の憂鬱」

2年Bクラス表

男子16人 + 女子16人 = 全32人

「バカとテストと召喚獣」

担任 西村宗一

男子

「俺の姉妹達の憂鬱」

天川 勇一
唐谷 枯渴

「バカとテストと召喚獣」

吉井 明久
木下 秀吉
土屋 康太
坂本 雄二

「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」

高坂 京介
赤城 浩平

「IS・インフィニット・ストラトス」

織斑 一夏

「とある魔術の禁書目録」

上条 当麻

土御門 元春

青髪 ピアス

一方通行

「まよちき」

坂町近次郎

「Angel Beats!」

音無結弦

日向 秀樹

男子16名

女子

「俺の姉妹達の憂鬱」

天川 希

「オオカミさんと七人の仲間たち」

竜宮乙姫

「バカとテストと召唤獣」

姫路 瑞希

島田 美波

霧島 翔子

「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」

五更 瑠璃（黒猫）

田村 真奈実

「とある魔術の禁書目録」

吹寄 制理

上条 インデックス

「猫神やおよろず」

小宮 柚

「I S・インフィニット・ストラトス」

篠ノ之箇

ラウラ・ボーデヴィッヒ

「まよちき」

近衛 スバル

涼月 奏

「Angel Beats!」

立華 奏

ユイ

女子16人

2年Bクラス表設定（後書き）

このクラスで球技体育祭に出ます。

もし他のクラスも知りたい方がいればお答えします

前回の感想が出来なかつた人は
ここに前回の感想書いてください

ラウラ & シャルさん、ラウラとシャルに感想してあげてありがとうござります

引き続き感想お願いします

球技体育祭編 始動！（前書き）

どうも 2次元です 球技体育祭が始まるとなればいろいろと設定を考えなければなりません
まあ気軽に読んでください

球技体育祭編 始動！

「俺の姉妹達の憂鬱 9話」

「選手 入場！」

学校のグランドの外 入場門から1年A組～D組、2年A組～D組、3年A組～D組と4列ずつ入って来た。
そしてその列は横に並び、左から

1年A組男子1番～8番

9番～16番

A組女子1番～8番

9番～15番

と感じに並んでいた。

「この日の気温は暑すぎず、寒すぎず、まさに普通なみ

「校長 宣言」

え？ 校長宣言？ 選手が書つのではなくて校長？ おいおい冗談だろ！？ ハゲツルの爺長が宣言なんて下らねえ」
なぐんて思つてたりすると台から現れたのは……

ピンクの髪にあほ毛がうずまきでなぜかさらしをしていて背負い物をして衣を肩腰に着て下駄をはいてるなんとも昭和くさいかっこ、しかも小さい」…… 小3くらいになるが、小さい……

？ 「お前達、今 小さいと思っているがこれでも大人なの」

その子はふとこからビールをだし、ぱかっと開けグビグビビールを飲んでいる

西村「シャモ校長 今はビール飲んでは行けません」

シャモ「これは 失敬なの、では第10回 THE World X高

等学園 球技体育祭をはじめるな」

シャモ校長が宣言して球技体育祭の開始宣言をした。

え～と 8時50分 第1種目が9時10分に始まるから準備しないと、午前中は男女分かれて競技をする、そして昼からは男女で競技する

1種目 50メートル走

勇「よーし、他の組に負けないように頑張らないとーー！」
俺はそう決意した。

各組テントへ

グランドのトラックを囲むテントのところに競技を待つ

勇一「…………」
じーっとトラックや他のテントを見ていた。すると横から枯渴が来た。

枯渴「何ばーっとしてんだよー！？」

勇一「え！ いや ただじーっと」

枯渴「ふーん、けど休んではいられないぜ」

勇一「どうゆうこと？」

枯渴「他の組に最高速がいるらしい、」

勇一「へえ～ 一度戦つてみたいもんだな」

枯渴「じゃ気合い入れる必要ないな」

勇一「まさか入れてくれようとー？」

枯渴「お前のことだから弱気になつてんじゃないのかと」

勇一「ありがとよ でも大丈夫 俺は弱気にならないぜ！」

枯渴「なら いいけど（これより第1種目 1年～3年男子、1年～3年女子50M走を行います 種目に参加する生徒は入場門で待

機して下さい（おー！そろそろだな）

勇一「じゃ行きますか！」

俺と枯渴は放送を聞いてすぐさま動いた。もちろん周囲にいた同じ組、別の組も動いた。

さて やりますか……今年こそ優勝だ――――！

TO be continue

球技体育祭編 始動！（後書き）

次回から種田編 難しいけど頑張ります

ラウラ & シャルさん、シオンさん

感想ありがとうございます、引き続き感想お願いします

第1種目 50M走（前書き）

いつも 2次元です

今回から種目「」とに投稿していく予定です

第1種目 50M走

「俺の姉妹達の憂鬱 10話」

？「ああ～今年もやつて参りました THE XWorld 高等学園 球技体育祭！ また激しい戦いになるでしょうか！ 実況はこの俺菊池家康がお送りします、そして俺と一緒に解説をして下さる今日のゲストさんです どうぞ！」

？「こんにちは みなさん 巴 マミです 今日は悔いがないう頑張つて下さい」

家康「とのこと！ 会場のみなさん 期待しますよー！」

おいおい、俺達はそんなには出来ないんだぞ！

にしてもゲストつてうちの生徒じゃん！？ 何がしたいんだが、そういえば巴 マミは3年で成績は1～2位の優等生、よく相談とか乗ってくれているとか、ホントいい人 まあうわさで聴いたんだがなどと思つてたりしているとやつと1年の50M走が始まった。

家康「さあ～始まりました1年の部 男子の走りは風邪を斬る生徒やホップ・ステップで走る生徒などいろんな人が走つてましたね

巴 マミ もんはどう思います？」

マミ「そうね こんなに個人の芸術ぶりの走り方は初めて！ て もう何も迷わない！ わたしずっとここに見ていたいから……」

家康「そ……ですか……」

そのあと解説は続いていた。10分後、1年の部が終わり、いよいよ2年の部が始まる入場門から出てきた2年A～D組 校舎の中央トラックの中で整列した

左からA、B、C、Dと1番手が並んだ

家康「続いて2年の部に参ります 2年男子1番手

AコースA組 鮫田吉川

B「ースB組 吉井明久
C「ースC組 久保利光
D「ースD組 仔野田 雅俊の配列になります」

明久「あ！久保君！」

久保「あ！吉井君！」

明久「まさか最初の一一番手が一緒だなんて奇遇だね」

久保「ホント 僕も嬉しいよ、（吉井君と一緒に走れるなんてこれは天の神からの願いなのか！？）」

明久「ん？どうしたの久保君？」

久保「！！！ な、なんでもないよ！！」

明久と久保君？何話してんだろう？といふか今競技中なのになにやつてんだよ！！

工藤「は～い、おしゃべりはそこまで じゃ行くよ」

体育実行委員の工藤さん、相変わらず体育委員に似合つてるね

明久「久保君 この勝負恨みつけなしだよ！」

久保「構わないよ、吉井君と勝負が出来て 本氣でいかせてもらつよ！！」

明久「負けるもんか！！」

工藤「スタート！！！」発声と同時にピストルを空に向けて撃ち、
開始の合図をした

家康「第1走者4人が走りました！トップは吉井明久、2位は久保

利光、3位鮫田吉川、4位仔野田雅俊

マミ「さすがは 男の子ね、結構足速いんですね」

久保「（吉井君の後ろからみた姿は愛くるしい背中）」

明久「（な…なにやら悪寒が）」

よし、明久と久保君の距離は近いけどそのまま逃げ切れば1位は取

れる！

土屋「……『ゴール』

ムツツリーも一応体育委員の仕事をしてるんだね

家康「4人がついに『ゴール』しました、順位は

1位久保利光

2位吉井明久

3位仔野田雅俊

4位鮫田吉川

という順位でした。なお、50㍍走の順位ポイントは

1位50点

2位40点

3位20点

4位10点

で行います

マミ「男子生徒のみなさん、頑張って下さい」

男子「おお――――！」

やはりーの学園にマミたちのファンがいるようだ

家康「それでは第2走者以降参りましょー」

このあとも走者は続き、

第2走者、雄一の時

雄一「へつー お前らなんかへでもないぜ、
するとB組テントか

霧島「雄一ー！ 1位になつたら結婚してーー！」

雄一「しょーーーーーーーー翔子ーー？」

須川「坂本！？貴様というやつは……成敗してやる……！」

雄二「ひいいい！！これは勘弁だ！！！」

A組の須川の憎しみで雄二が圧勝で1位取っちゃって逃げている感じだった

3走者 A組野田は木刀持つていやがる、そつかハルバートは機密で没収されたんか

野田「おい！そこのづらー！」

京介「ん？俺か？俺はづらじやないぞー！」

野田「貴様が女の子の周りにいるなんて前にくわねえ、男ならガツンと行け！」

京介「はあ？意味わからんねえ～」

工藤「スタート！」

野田「この、ハーレム男が！！」

京介「ギャーーッ！！」

あれ？京介は野田に追いかけられて野田は京介を木刀で殴ろうとしてる！

野田はせめて武器がないと落ち着かないから木刀で許可をだしたらしい

土屋「……ゴール」

あの「一人」ゴールしてもまだ続いてる

そして5番手

直井「音無さん！？」

藤巻「音無！？」

音無「直井！に藤巻！か～なんか奇遇すぎて恐ろしいな～」

A組の直井、D組の藤巻

直井「僕は音無さんと走れて嬉しいです、そつとのせいとせ違つて」

藤巻「おいー？直井！それはどうこういとだー！」

直井「ぞこを呼んで何が悪いー！」

音無「お前ら今ケンカするなー？」

その後も走るが

1位 C組 水原

2位 A組直井

2位 B組音無

4位 D組藤巻

という結果に、それにしても直井はもつと走れるきがしたんだがなぜ音無に合わせた？

第6走者

当麻「さあーて走りますか！」

?「おい！上条当麻 あんまり浮かれるなよー！」

当麻「あー！スタイル！ にしても背高ーな」

スタイル「改めていうことじやないだろうがー！」

D組 スタイル 身長が195cm弱あるし大人に見えるがこれでも学生

スタイル「彼女はどうだ？」

当麻「彼女？あー！インテックスのことかー」

スタイル「あんまり口にしていうなよーー！」

当麻「あー ごめん ごめん、（インテックスなら普通にしてるけど）」小声

スタイル「そ、そつか……けど勘違いするなー 別に彼女のことは何とも思つてないからなーー！」

当麻「はいはーーー！」

工藤「スタートー！」

そして駆け走る2人とその2人を追いかける2人

当麻「にしても……スタイル！お前 前が邪魔だ！」
スタイル「文句を言うな！！上条当麻！」

結局順位が

D組	スタイル
B組	当麻
A組	篠原
C組	牧田
になつた	

第8走者

A組	闇潟原
B組	天川
C組	杉崎
D組	野々村

勇一「よつ！鍵」

鍵「あ！あの時の代役の人！」

勇一「あれから決まつた？」

鍵「決まつたというか正しい人、かなでさんが決めただけどね」

勇一「どんなの？」

鍵「この後に言うよ」

俺と鍵は位置に着いた。工藤さんの合図で俺を含めた4人が走る、ほとんど大差出ず

1位 A組	闇潟原
2位 C組	杉崎
3位 D組	野々村
4位 B組	天川

勇一「鍵、聴かせてかなでが決めたあれ？」

鍵「お前に言つて何がなるのか？もう生徒会じゃないんだし」

勇一「一応聴いとかないと心のもやもやが消えないんだ！」

鍵「わーつたよ……えつと……確か……」

（4・9話）（生徒会の一存にて）

俺が生徒会室を後にしたその日

鍵「かなで会長、決まりました？」

かなで「そうね、題名は

暑さを乗り越えれば涼しさがやつてくる
みないな」

（4・9話）（生徒会の一存にて）

鍵「つて会長が決めた」

勇一「そ… そうか、」

変わった題名だな」

その後も何人か続きいい成果が出た人もいた。

俺らB組男子は

1位50点を取つた人

雄二

京介

一方通行

日向

土屋

2位40点は

明久

上条

赤城
秀吉
枯渴

3位20点は

近次郎

音無

土御門

青髪

一夏

4位 10点

俺 勇一さつ

トータル560点追加

次は3年の部

3年は最後の球技体育祭だから悔いがないよう一生懸命に走つていた。

家康「いや～魅力的ですね、3年生は最後の力を振り絞つて頑張っていますね」

マミ「ホント、いいもんじやないわよ、球技体育祭つて結構ハードで体力を使うから大変なのよ。次の休みの日は朝から突然筋肉痛でなかなか動けないんだから」

家康「確かにそうです、みなさんは気をつけて下さい」

全く そして第1種目が終わり、現地点の点数は

A組	1420点
B組	1350点
C組	1310点

D組 1290点

という結果になり
次の第2種目に持ち越した。

TO be continue

第1種目 50M走（後書き）

話が長くなつてしましました。
結構大変です。でも頑張つて書きます

第2種目・大いなる騎馬戦（前書き）

どうも2次元です

今回は2つに分けて書きました。
予想以上にまとまらなかつたんで
どうぞ読んでください

第2種目・大いなる騎馬戦

「俺の姉妹達の憂鬱 11話」

家康「さて第1種目が終わり、第2種目の戦いが今始まるうとしています 第1種目のゲストは巴 マミさんでした。続いてのゲストはこちら2人です」

？「こんにちは、私 鹿目まどか です」

家康「今度の2人はなかなか可愛いらしい人がやつてきました！」

まどか「なんだか……緊張……するな……！」

ほむら「大丈夫！ まどかには私がついているから」

（B組2年のテント付近）

勇一「へえ～ゲスト また変わったんだ～」

？「おーい！勇一、」

勇一「ん？……あ！一夏！」

あいつは織斑一夏、

一夏「何ぼけーつとしてんだ？」

勇一「え！？」

一夏「ほら、2種目目が始まるから行くぞ！俺らチームだろー！」

勇一「そうだつたな」

俺は一夏に呼び出されて一夏と一緒にまた入場門前に行つた。

俺と一夏は整列に間に合い騎馬戦のチームごとに並んだ。俺のチームには枯渴と近次郎がいた。

近次郎「遅かつたな」

枯渴「何やつてたんだ？」

勇一「ちょっと……な」

今グランドには1年の騎馬戦が始まっていた。それは途方もない戦いだった。1年の割には恐ろしい戦いで、マジにしか見えない騎馬戦、まず戦う相手を探す、見つけたらバトルするが、ここからが重要なんだ！

馬に乗つてる人間は相手の人間を地面に落とすか馬を完全に崩すまで乱闘し続ける！馬はそのサポートとして突進をする

そう、我が学校は他の学校の騎馬戦とは一味違うのだ！毎年毎年負傷者が2、3人この騎馬戦に出てしまう命がけの戦い！

そしてこの戦いは代表トーナメント式、各学年ごとに代表トーナメントとして勝ち抜いたチームが学年の代表となり、それぞれの学年と総当たりで戦い、優勝を行う

家康「おーーつとーー！」

スピーカーから驚きの反応をした家康の声がした。
「2年男子はグラ
ンドを見た、その光景は
あるAチームは3組のチームに囲まれている

家康「なななんなんと！！AチームはB、C、Dチームに囮まれてリ
ンチされてます！」

まどか「そんな！卑怯だよー！ こんなのあんまりだよー！」

哀想「」

男子A 「やばいだろ！あれ！」

男子B「でも、あいつのは反則にはならないらしいぜ！」

「全力で突っ走れ！そこには希望がある……！」

つて格言があるし」

男子の「Jの学園は格言通りにしてやりすぎだと思つ」

などと、小耳で聞いていた俺 ちよつといじの学園はいろんな意味で

危なすぎる

そんなことを思つてみると1年の騎馬戦に変化が！？

家康「なんと！？」囲まれていたAチームは、囲んでいたB、C、Dを蹴散らし、指揮官していたチームを返り討ちにして勝利を手にした！！

おとかす」レギュラーキャンペーン!」

ほむる。これは期待が出来るね。

家康の解説やケストの二人のシンジオモモガタが研がは量悪の状況を見事形勢逆転し、1年代表として代表 総当たり戦に出場した。

セミナー

枯渴「この戦い、本気でやらないと、

考えてる」とはみな回じつて「」とが

一年の騎馬戦が終わり、全員が退場門へ出て行つた。

家康「さゝてお次は、2年の騎馬戦です」2年A→Dは入場門から入つてグラウンドに行き、四方に分かれ組まれた相手の正面に立つた

A

グランド

D

1回戦第1試合

ANSWER

その試合はまるで獲物を狩るような戦い、最初はD組が押していたけど、その5分後にAの勢いがあがり、圧倒的にD組を全滅した。よつてA組が2チーム残して勝つた。

第1回戦第2試合

B vs C

この戦いは苦戦するがなんとか勝利をした。

とあるチームが乱闘している間、俺らのチームは2対1で攻めて相手の戦力をじわじわと減らして確実に相手を倒してやつた。よつてB組は3チーム残して勝つた。

いよいよあのA組との決勝バトル

その前に3位決定戦

C vs D

もういたつて普通のケンカみたいな感じだつたな
よつて3位はD組

ポイント的に40点

4位のC組は20点

そしていよいよA組との決戦！

A組に対しても前のやり方は通用しない、強豪揃いだ

家康「さあ残すとこ決勝戦だけです！果たしてどちらのチームが勝つんでしょうか！？」

それぞれ騎馬の用意をする、あとは開始の合図 それまでは互いに睨み合い！

家康「それでは、決勝戦スタート！！！」

A組「おおーーーー！」

B組「おおーーーー！」

俺達の戦いが幕を開ける！

T
O
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

第2種目・大いなる騎馬戦（後書き）

我ながら遅れているけど まどかマギカにはまつてます、この作品に追加するってことはそのキャラが好きでだすことになります

朝方この作品を考えていたら天川家にもう一人追加しようつと思ひます
詳細はこの作品で教えます
感想・意見があれば書いてください。まだまだ球技体育祭編は終わ
りませんよつ

第2種目・騎馬戦・後編（前書き）

どうも 2次元です

最近 なんか書く力がないといつかだるい日が続いてまして
投稿が遅れました

話は前回の続き 後編です
ではどうぞ！

第2種目・騎馬戦・後編

「俺の姉妹達の憂鬱 12話」

一方通行「お前ら！……死ぬきで突っ込め！……」

明久「行くぞ！雄一！秀吉！ムツツリー＝！」

雄一「正面は任せろ！」

秀吉「サイドからはわしが！」

土屋「速さなら任せろ！」

バカテスチーム意気投合してる！？

なんてやつらだ！？

音無「勇一！」

勇一「！」

音無「お前は俺達の反対側に回れ！」

勇一「というわけだ、ゆけ！……」

枯渴「任せとけ」

音無に言われて反対側に行く、するとバカテスチームとバトルしているのが目に映った。しかも相手はこちらに気づいてない。これはチャンス

勇一「枯渴、一夏、近次郎 敵は2時の方角だ、行くぞ！」

俺らのチームは敵の騎馬の背後を狙つて前進した。近づいて枯渴の突進攻撃！！

A組チーム2「うわっ！」

男子「くそっ！背後から！」

明久「よそ見は禁物だ！」

男子主頭「ぐはあっ！」

明久の右フックが決まり主頭は倒れ、陣形が崩れた。

勇一「やつたな、明久」

明久「ああ」

A 3 √ S B 4

勇一「この調子で行くぞ！」

A組チーム3主頭「もらつた——！」

一夏「しまつた！」

近次郎「間に合わない！？」

いつの間にか俺らの背後に回っていた！

このままでは陣形が崩れる！？

音無「やらせるか！」

日向「いつけー！音無！」

京介「お前らの邪魔はさせねーぞー！」

赤城「そこーどいたーどいたー！」

俺らの背後を狙つたチーム3を音無達が妨害して俺らを助けた。その後、2組は陣形が崩れ失格になつた。

A 2 √ S B 3

勇一「すまない、音無達の分まで戦つてやるよ、さあ行けー！」
枯渴と一夏と近次郎の足で俺を支えながら前進する、相手は2チー

ム こつちは3チーム、2、1で行けば勝てる！

一方通行「貴様が親玉かア」

？「おやおや 誰かと思えば一方通行いやアクセラレータじやないですか？」

一方通行「別に言い直さなくてもいいだろ？がア 沖田
ん？アクセラレータが戦いを挑んでるやつは 沖田 宗悟 あいつ
超がつくほどひのうでさやう

沖田「アクセラさん、いつちよやつちまいましょうか！？」

一方通行「上等だ！ひねりつぶしてやる！」

あーあーもうあーなつては手がつけようにないな

勇一「枯渴、一夏、近次郎 他の敵に行くぞ」

枯渴「え！あいつけいいのかよ！」

勇一「あいつけ好きに暴れさせとけばいいんだよ！俺らは明久達の方に向かうんだ！」

一夏「わかつた」

近次郎「あいよ」

俺達はとあるチームを無視してバカテスチームの方へ行つた

勇一「明久達！」

明久「勇一 大丈夫だつた？」

勇一「ああ！なんとかな、さつさと敵を倒すぞ！」

明久「OK」

俺達とバカテスチームは敵のもつひとつ1チームの方に2チームで倒しに行つた

勇一「ああーー！」

敵チーム「来たな！」

明久「こつちもいるよー！」

敵チーム「な！何！」

俺達とバカテスチームは2対1で挟み撃ちで攻め、殴り合いをする

そして見事に敵チームを倒し、とあるチームが戦つてる相手へと向かつた

明久「いつけー！」

明久達の騎馬は最後の敵チームに攻撃を仕掛けた

土屋「！？」

雄二「どうしたムツツリーーー？」

土屋「！…」ブシャー

秀吉「ムツツリーーー！今倒れたら陣形が！」

明久「え！え！ちょっとムツツ…」

バカテスチームはムツツリーーーが倒れ人馬が崩れた

家康「おつとーここでまさかのバカテスチームがいきなり崩れた！土屋康太選手なぜ倒れた！？しかも血が大量に！…」

これによりバカテスチームは失格、ムツツリーーーは保健室送りになつた…

A1 v S B2

一夏「土屋君大丈夫かな？」

勇一「大丈夫 大丈夫ムツツリーーーは強いからすぐ復活するだろ」

近次郎（俺と似た者同士…）

勇一「気を取り直して行くぞ！！」

俺達はとあるチームと一緒に敵チームを倒しに行く！

沖田「アクセラさん、あなたの力はそんなもんなんですか～」

一方通行「うつせエー！お前こそ俺にたてつこうなんて100万年はえーぜ！」

アクセラレーターと沖田の中は最悪中の最悪！

アクセラレーターと沖田は手と手で掴みあつてゐる

当麻「おい！アクセラレーター！早いと…けりをつけて…くれ」

土御門「そう…だぜえ…このまま…だと」

青髪「相手の…思つがままや」

一方通行「お前らあ！俺に指図すんじやねエー！」

アクセラレータと沖田が戦っている時、俺らは止まって見ていた。

枯渴「どんすんの？」

勇一「ここは2チームが落ちるのを待とつ」

枯渴「正気か！お前は！」

だが俺の選択肢は間違つてはなかつた。時間かけて5分後2チームとも力が尽きて失格となり ほぼぼーぜんと立つてそのままB組が代表戦に進出

あの二人の暑苦しさにみなもバテバテ

家康「とーいう訳で最後は犬猿の中で互いに失格となり残つたB組の1チームが勝利しました！これで2年代表として代表戦に選ばれました！」

この後の代表戦は思いもよらぬ展開だつた。

組み合わせくじで決まり、組み合わせの結果は1年C組と2年B組が対決

さつそく1年と対決するが

1年C3 vs B0で1年が勝つた

予想以上に強くて俺達より早く連携プレーしてやられた

そして1年 vs 3年の対決

最初は1年の速攻連携プレーをかます、たが1年の連携プレーは3年の1・3プレーでやられた

1チームが囮になつて（いわゆる餌になつて）それにかかつた獲物を3チームで潰しまくる、相手の連携を利用して全滅させた。

家康「さてポイントはどうなつたかというと……

組対決 総合ポイントA組 580点

B組 550点

C組 590点

D組 530点

そして代表戦ポイントは

1年C組	750点
2年B組	600点
3年D組	900点

を加算

よつて

A組	2000
B組	2500
C組	2650
D組	2720

A組は代表戦に出ることが出来なかつたため特別ポイント500点を加算

よつてA組は2500点

1位	D組	2720	点
2位	C組	2650	点
3位	A組	2500	点
3位	B組	2500	点

という結果になりました。男子生徒の皆さんお疲れさまでした！

午前中の種目大変だつたでしうがここから休憩が入り、

次は女子生徒の番です

女子生徒の皆さん、午前中の後半戦頑張つて下さい

ようやく男子生徒の活躍が終わつた

次は第3種目・借り物競争となる

T
O
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

いろいろと省略しきりですいません

すでにずっと先の話を作つてましてそれを書きたいのに書けないのが辛い
でも頑張つて書きます

次回の投稿は気分と気力次第で出します

なにか誉めことばがあれば勇気がわけるかもしませんよ～

第3種目・女子達の借り物競争（前書き）

いつも・・・・2次元です

今回投稿が遅れて・・・話がぐだぐだかもしれませんので

それでも構わないなら読んでください

第3種目・女子達の借り物競争

「俺の姉妹達の憂鬱 13話」

家康「さて短い休憩が終わり、第3種目 借り物競争が始まろうとしています」

2年B組テント

勇一「今からだと俺達の出番なさそうだね」

枯渴「だな、見るしかないようだし」

「これからは勇一の代わりに作者が愛する人に変わつてもらいます

希「にやー りょーかーい 」

次の競技 借り物競争

私達2年がやる前1年が先に見本のよつなやり方を見せてくれたとてもすごかつた、内容的借り物競争じやないことはわかつたけどなんだか楽しそう

姫路「希ちゃん、」

希「瑞希、どうしたの?」

姫路「もうすぐ始まりますよ 早く並ばないと」

希「にやーわかつた」

私はグランドを見ていたけど瑞希に見つかり、瑞希と一緒に列へと戻りに行つた。

そして列に戻り、私の隣にはなにやら見覚えのある人が並んでいた。競技が開始してから10分が経つ、やつと1年の借り物競争が終わ

つた。いろんな人が物や人、貴重品など持っていた。

これは事前にアンケートで書いた中から使われたいたみたい
ということは私が書いたあの紙が入ってるかも……

そして2年女子が列のまま動き、トライックの南側へと並んだ。反対側は土台の上に箱があり中には指名の紙がある、それが4つつまり私が書いた紙は4分の1

初めは乙姫が一番手にやっ

乙姫「こうなればなんとしても勇一様との密着指名をゲットしないと！」

勇一「ブルブルブル！」

枯渴「ん？どうした？」

勇一「なにやら……悪寒が……」

鈴「足なら負けないし一夏は私の物だから」

2年A組 凰鈴音

律「さて、部長の力を見せるとしますか！」

C組 田井中律

?「さて、何を借りるのか楽しみだ」

D組 美樹さやか

土屋「…………それでは位置について…………よーい、」

保険体育係りの土屋康太

さつきまで保健室に運ばれたはずなのにもう帰つてきてる
私はB組含めA、C、Dを心から応援している

ドンッ！…

スタート合図はピストルを上空に向けて音を響かせた

その同時に4人の生徒は4つの箱を目標として走っている
来た順番に好きな箱の中から指名紙を取つて40秒以内 ゴール出
来れば

100点

1分以内 ゴール出来れば50点

それ以降は10点にや～

最初に手をつけたのは凰鈴音
手にした指名紙は

鈴「なによ～これ～」「一夏の男友達」一夏の男友達つて…………あいつしかない

凰鈴音はそのまま箱を通り過ぎどこかへ行つた

次に来た人 田井中律
律「前の人は早いな～、さてお題は「部の一部」軽音部でもいいのかな～」

田井中律は急いで校舎へ走つて行つた

次は美樹さやか

さやか「さてお田当ての物は「杏子の食物」…………なんで食べ物、
しかもようによつて杏子のかよ～」

美樹さやかはまだ列にいる佐倉杏子という人に急いで話しかけた。

さやか「杏子～」

杏子「ん～さやかどうした？」

さやか「あんた、食べ物持つてない？」

杏子「食べ物？ そうだな」C組教室の黒板に向けて前から4番目、左から2番目の席にあると思うから

さやか「わかつた ありがとう杏子」

杏子「まあ 頑張れ」

美樹さやかは佐倉杏子と話をした後、校舎へ向かった

最後は竜宮乙姫

乙姫「みなさん、早いん、ですね、はあーはあー、では勇一様との願いは！ 「勇一の姉」誰です！ ？こんなのを書いた人は！ ？つて怒つても仕方がありませんよね～、勇一様のお姉さんって確か、涙子さんって勇一様が言つてましたよね」

4人がそれぞれの物を取り行つた

乙姫「涙子さん、涙子さんはいませんか？」

竜宮乙姫はグランンド中に聞こえるぐらいの声だした。

涙子……涙姉ちゃんを呼んでる

初春「サテンさん、」

涙子「ん？ どうしたの 初春」

初春「誰かが呼んでますよ」

涙子「ホントだ、ちょっと行ってくる

テントから涙姉ちゃんが現れた。

涙子「はい、私が涙子ですが」

乙姫「良かつた、借り物競争の物が見つかって」

涙子（私が借り物競争の物）

乙姫「少し時間いいですか？」

涙子「ええ、いいんですけど」

乙姫「じゃ借り物競争なので私と一緒にゴールしてください」
涙子「はあー、」

こうして1番は36秒で竜宮乙姫、借り物は涙姉ちゃん
そして後から45秒 凰鈴音が……勇一を連れてゴール にやー嬉
しそう

鈴「まつたく！なにぐだぐだしてんのよ！」

勇一「はあーはあー、お前が早く……はあー……借り物競争つて……
言つとけば焦らずにはあー……済んだ……のに」

その後、52秒で美樹さやかが来たにやー

さやか「たぐつ、行きも、帰りも……遠いよ

借り物はポツキーの箱 中身もある

最後は58秒の田井中律

律「まあ結構かかつてしまつたけど部の物ならドラムスティック！
でもいいんだよなー」

家康「結果はB組100点 A、C、Dは50点を加算です、さあ
第2走者はこちらです

A組 シャルロット・デュノア
B組 天川希
C組 佐倉杏子
D組 芹沢文乃

土屋「…………位置について…………よーい

パンッ！

私は音がなった瞬間、スタートダッシュして3人を引き離した

わずか6秒で借り物箱に到着、箱に手して紙を取つた
内容は「勇一様」にやあ？

なんで勇一？私は一瞬不思議に思つたけど、今は借り物競争に集中する、そして指定してある物を探しに行つた

すると他の組テント裏に勇一の帰る姿があつた

勇一「はあ～、俺は借り物じゃないんだぞ～」

希「勇一、勇一」

勇一「ん？、希……どうした？」

希「借り物競争だから」

勇一「ま…さ…か…」

希「だから早く行こ」

勇一「の…希、そんなに手を引っ張るな！てか早すぎ……！」

私は勇一の手をつかみ、来た道を引き返した
そしてトラックに戻り、ゴールテープがあつた
まだ誰もゴールしてないにや～チャンス

私はそこから勢いよく走りゴールテープにさしかかつて完走した

結果 1位、35秒 借り物「勇一」

勇一「はあ、はあ、またもや借り物扱いに～」

希「大丈夫？」

勇一「あ…ああ大丈夫さつ」

後の人達もみんな帰つてきた

2位 文乃 40秒 借り物「野球バット」

文乃「この野球バット、試しかいがありそうね

勇一「いやーそれは野球道具の一式だから」

3位 佐倉杏子 58秒 借り物「友人の私服」

杏子「いや～ギリギリセーフ、さやかが持っていたなんて思わなかつたよ、結構いいじゃんこ」のジャケット」

4位 シャルロット・デュノア

1分2秒 借り物「ほつき」

シャルロット「う～少し遅れてしまつた、もつもつと足が速かつたら～」

家康「これで第2走者が終了」、さあ～この後一体どんな借り物競争になるんでしょうか！？」

この後、B組の女子は借り物競争を大いに楽しんでいた

そして15分後、2年女子の借り物競争が終わつた

家康「いや～女子達の借り物競争 素晴らしいですね～、勇一君はなぜ7回も借り物になつたでしょうか！？」
では総合ポイント

A組840点

B組680点

C組720点

D組550点

よつてトータルポイントは

A組3340点

B組3180点

C組3370点

D組3270点

よつてまたもや順位が変更！

1位	C組	3370	点
2位	A組	3340	点
3位	D組	3270	点
4位	B組	3180	点

となりました。

C組とA組の順位は変わらず上位に上がり

C組がトップとなりました。D組は1位から外れ3位に落ちてしまつた

それに比べB組は、最下位に けど点数が近いえまだ逆転は可能、次が午前中ラストの競技、午前中の競技でどれだけ点数を足せるか見ものです

いよいよ次が午前中最後の競技

私はぐじけず最後まで頑張る！

そう心で決心をする私、

TO be continue

第3種目・女子達の借り物競争（後書き）

今回は希視点で書いたんですけど
うまくできたか・・・
またいつ更新できるか気力しだいになります
あと意見や感想をください

第4種目・コスプレ大会！？前編（前書き）

ずいぶん遅くなってしましました
結構 小説作りも楽ではないですね
読む方は暖かい目で読んで下さい

第4種目・コスプレ大会！？前編

「俺の姉妹達の憂鬱

家康「さあ！！ いよいよ午前中最後の競技となります！ それは突然紙が送られて来ました、

女子A「なんでコスプレなのよ！」
女子B「頑
おか」「や
ないの！
そ
れ
も
や
な

いや～女の子の不満な言葉がいつまでもしゃべらん

家康「いやー、俺に言われてもとあるひ・くの手紙が来て絶対命令されてるから」「

～2年B組テント～

枯渴「なあ勇一、」

勇一「なんだ? 桜湯」

勇一「さあ、俺には知らない」

枯渴「S・Kだから今流行りのSKE48の一人とか?」
勇一「『言つらや悪ハジあれは』で元の世界」

枯渴「じゃ、サンタクロースの略とか?」

勇一「子供の夢をもつサンタがただの変態だった、なわけがなかろうが」

枯渴「じゃ 誰だよ？」

勇一「きっとすぐ出るだろ？」「

？」「そのS・Kはこの私！」

突然台から現れたのはちょっとメイドのような服装をして、髪はちょっとツインテで白いリボンで止めていて赤い瞳の女の子、私のクラスメイト

涼月 奏

涼月「さあ、今からコスプレ大会を開催するわ！」

男子「おおーーーー！」

男子のは涼月奏の言葉で大いに盛り上がってる

涼月「ではコスプレ大会の説明をします、それぞれの学年の各組ごとの代表が出来ます、

それで、ある人を鼻血で出血させた組には勝利ポイント1年は500点、2年は1000点、3年は1500点を差し上げます！」

男子「おおーーーー！」

枯渴「ん？どうした？勇一 そんなに震えて」

勇一「ガクガク…………ガクガク…………」

涼月「それでは審査をする人を呼びましょう 天川勇一君～天川

勇一～～～」

枯渴「勇一、なんか涼月奏が呼んでるぞ」

勇一「俺は…………知らない」

涼月「天川勇一君～～もし自ら出て来ないならこちから探しに行くわよ」

そのころ天川の人達は

3年・C組「涙子」「勇一、何してんの？涼月さんが呼んでるのに」

2年・D組「桐乃「あのバカ！さつさと出なさいってば！」

五更「あら、あなたが勇一君のこと気にかけるなんて意外だわ」
桐乃「はあ！あたしがあいつに気にかけるわけがないでしようが！」

沙織「キリリン氏、外心はそうおっしゃってるでござるが内心は本当のことを……」

桐乃「うつさい……」

1年・A組「梓「お兄ちゃん、何やつてるだろひ？」

2年・B組「希「勇一……」

2年・B組「勇一「俺は知らない、俺は知らない」

涼月「現れないなら、こっちから探しに行くわ」

涼月奏は左手にマイクを持つてて、右手で指を鳴らした

パチン！

すると勇一の後ろに2人の女子が
勇一の腕を組んで持ち上げた

勇一「！？」

スバル「では参りましょうか」

音姫「さあ勇一様、行きましょうか」

勇一「え！え！ってスバル！音姫！どういうことだよ！……」

スバル「これは奏お嬢様からの指名ですから」

音姫「勇一様には罰というものがありますから」

勇一「いやだ……！」

勇一は両方に腕を組まれて涼月奏まで連れて行つた

涼月奏の前では勇一腕は近衛スバルと竜宮音姫の2人に捕まれて座らせて、それはまるで江戸時代の拷問みたいにやく

勇一「んで、俺に何をしろ と！」

涼月「あら、私の話 聞いてなかつたの？」

勇一「お前が何を話しているのか全然わかんな……いいいい！」
「……いたいいたいいたいいたいいたいいたいいたい！」
「その腕は曲がらないって！」

スバル「おい！勇一！奏お嬢様にお前呼ばわりするな！」

涼月「仕方がないわね、もう一度説明をするわ 要するに他の学年のクラスがあなたを大量出血をだせば高得点がもらえるわ」

勇一「それって俺を殺す気か！？」

涼月「それでは審査員の勇一君とこうことで始めるわよ～」

勇一「俺のことは……無視かよ……」

こうして勇一は台の前で椅子に座らせて体と足を動かせないよう縄で縛られた

勇一の隣には涼月奏が司会としていた

涼月「では始めるわよ、まず1年生達のクラス

A組・五更瑠璃

B組・中野 梓

C組・平沢優

D組・坂町 紅羽

2年A組・高坂桐乃

B組・姫路 瑞希

C組・佐倉 杏子

D組・芹沢 文乃

3年A組・檜島 沙織

B組・仲村ゆり

C組・巴マミ

D組・天川 涼子

です！」

涼月奏に指名された人は驚いたてた

涼月「まず 1年から

A組の五更瑠璃さん

B組の中野 梓さん

C組の平沢 優さん

D組の坂町紅羽さん

前に出て下さい」

梓と梓の友達平沢優と五更瑠璃と坂町紅羽が勇一の少し前来た

瑠璃「まったく、なぜあなたのような人種にコスプレなどと見せなくてはならないのかしら？」

紅羽「私は近衛先輩がよかつたな」

梓「なんでお兄ちゃんなんかに～～」

優「私、そこまで自信がないのに～」

涼月「では体育委員の人達から衣装を受け取つて、そしてカーテンの輪の中に入つて」

女の子4人は体育委員から衣装を受け取り、カーテンの輪に入り体育委員が輪のカーテンをあげ4人の女の子全体を隠した。

涼月「では着替え終えた人は報告してね」

カーテンで見えなくなつた女の子4人は着替えている頃……

勇一「あの……、涼月奏でさん」

涼月「何かしら、勇一君」

勇一「なんで俺なんすか？俺じゃなくても他のやつの方がいいんじやないですか？」

涼月「あら～、あなたは女の子のコスプレをまじかで見たくないのかしら？」

勇一「いや～確かに見たいのは見たいけど～」

涼月「ならいいんじゃない」

勇一「（俺の質問とは全然違う答えだし）」

そして5分後、カーテンの中でようやく着替え終えた人4人が言った

涼月「では行つてみよう 最初はB組の中野 梓さん どうぞ！」
にやう 体育委員の人は支えてた輪のカーテンを離し、着替え終えて
いた梓がいた

勇一 ブハア――！！！

あ！
勇一が鼻血を吹いて後ろに倒れた

男子は梓の猫耳メイドに歓声をあげていた

勇一「くう……まだ……まだ終わらんよ……」
勇一が鼻血で倒れた時、近衛スバルが戻した

涼月「では2人目、坂町紅羽さん」

勇一「ブフウ――――」

またもや勇一が鼻血を吹

涼月「あらあら～ 勇一君も大変ね～、コスプレ大会はまだ始まつたばかりだと言うのに～」

勇一 備に 悔み でせ あるのか!!?

あげて

スバル一はつ！お嬢様

勇一はまた近衛ノリは起された
涼月奏は勇一のことを軽くスルーして次の進行を続けた

涼月「続いての3人目 平沢優さん」

憂
へ
は
い
私
は
平
澤
唯
・
お
姉
ち
や
ん
に
な
り
ま
し
た
！」

男子で「スアレの女子」が好きなのかな?

3年C組テント

澪「唯！ 落ち着け！ あれは憂ちゃんが変装しているんだ！！」
律「唯でもドッペルゲンガーのことを知ってるんだ？」

涼月付近中央台

涼月「結構みんな威勢がいいわね」…………あら、勇一君
 鼻血は出
さないの?」

勇一「いや似てゐない」アーヴィングは二十歳を

うないのは、

涼用 一 そう、なら別に構わないけど、

涼月「では4人目 五更瑠璃さん」

最後の輪のガリテンか隠りた時
五更瑠璃の服装かすこか二た

瑠璃「…………あんまりジロジロ見ないでくれる」

服装は白いワンピースで真夏のイメージとした美少女に麦藁帽子

野子「おお――――！」

勇一「か……可愛い／／／／」

涼月「全くダメねえ、実況の菊池君判定を」

家康「ん？……あ！はい！失礼しました！！！え、判定……です
よね、結果、勇一が鼻血を出したクラスはB組とD組、よつてB組

とD組に500点を加算します。

え……コレより1年生のコスプレ大会を終了し、次は2年のコス
プレ大会に移行します

途中結果は

1位D組3770点

2位B組3680点

3位C組3370点

4位A組3340点

です でも1年でこんなテンションだと2年3年に期待出来ます
さすが3次元！中央台の涼月さんにお返します

涼月「はい ありがとうね菊池君、では2年の部始めるわよ！」

勇一「（菊池と涼月、どこで打ち合わせしたんだ？）」

TO be continued

第4種目・コスプレ大会！？前編（後書き）

今季も新しいアニメが出て来てまた新たに書きたいと思う小説が出て
て来て
大変です

次回はコスプレ大会後編です

第4種目・コスプレ大会！？ 後編（前書き）

どうも2次元です

本文が毎回長い文を作るので大変です
けど仕上がつてます

ぜひ読んでください

第4種目・コスプレ大会！？ 後編

「俺の姉妹達の憂鬱 15話」

家康「さあ～いよいよ2年のコスプレ大会の始まりだ！」

涼月「では2年生

A組高坂

桐乃さん

B組姫路

瑞希さん

C組佐倉

杏子さん

D組芹沢

文乃さん

前へどうぞ！」

桐乃「なんで勇一のために出なくてはなんないわけ！超ウザインですけど！」

瑞希「勇一君、私は他の女の子にも同じようにしているなんて少し悲しいです」

杏子「たくつ、なんで私がこいつのために着替えなくちゃならないわけ！？ サヤカだつたらいいのに」

文乃「全く 勇一にはあきれるわ、他の女子にテレテレしちゃって」

勇一「（うわあ～4人の失言が俺の心をぐさぐさと刺さるな～）」

涼月「では2年のコスプレ大会始めるわよ！体育委員！」

体育委員の人が4人にカーテンの輪で全体を隠し、その4人が渡された服装を着替え始めた

そして5分後、さつきと同じようにした

涼月「では4人のみなさん、準備は出来ましたか？」

桐乃・姫路・杏子・文乃「は～い」

涼月「では……………勇一君 覚悟は出来てるかしら～？」

勇一「…………」ぐつ、ああ、せうん

涼用奏は勇一の口にやけて見ていた。

涼月「では始めるわ、2年からB組姫路 瑞希さん どうぞ!」

姫路瑞希のカーテンの輪が降りるとそこには

青のビキニ水着でビキニパンツにミニスカートがついている可愛い

水着

姫路「あの…………笑わないで…………トセー

野乃「おお――」

男子A 「可愛いーーー！」

男子B 「最高！！」

(姫路瑞希の水着は

スバル「お前、吹き飛ばなー」

勇一「え？ ！！！ なんざやーつやあ！！

スバル「お荷物の運送は山田君?」

スリスリ お通汲み かなか たのむ

勇一は自分の鼻血を見て驚いていた

勇一「いや、今の今まで気がつかなかつたんだ」

涼月「ふううん、つまらないわね……」

では次、C組 佐倉 杏子さん

輪の力でテンが降りるとそこには

あるバーメの魔法少女戦士の服装であった。

野子「おお――――!」

男子A 「かつこいい！」

男子G「ベリーグッドー！」

(服装はまだかマギカ変身後にて)

杏子「意外とこれ、恥ずかしいだけ……」

勇一「可愛い」といつまつからこいこい。」

源月「全くたぬけ」全然女の子の魅力をわからてないわね」

スバル「奏お嬢様の言つとおり、もつと女子の魅力に気づけ!」

勇一 2人に怒られてる

東洋「アハラ」、魚、高級

月にては、久高坂橋乃さんと、手輪の力、テントが縛りると、祠乃はノリノリで、いた

桐乃「星くず・ういつぢ メルル ばーじーまーるーよーー」

にやゝ桐乃お姉ちゃん、なんだか楽しそう

תְּמִימָה עֲמָלָק כְּבָנָיו וְעַמְּגָדָלָה כְּבָנָי

(服装は俺妹の中のメルルの服装を桐乃が着ている)

勇一「あれ?」つちこ向かつてなイカ?

桐乃「メテオ・インパク……」

勇一「え？」

涼月「え？」

桐乃「ト――！！」

勇一「ゴバア――――――！」

桐乃お姉ちゃんはアニメコスプレの武器で走つて勇一の左顔面を殴

り、勇一はそのまま殴った方に縛られたまま倒れた
他の周りは睡然とした

桐乃「これで今ままの気が晴れたわ」
桐乃お姉ちゃんは勇一を殴ったあとスッキリと顔で元の位置まで戻
つた

涼月「あらあら、勇一君はいろいろと大変ね」

勇一「俺の桐乃がコスプレをして俺を殴るなんてあるわけないよ…

……」涙

3分後……

勇一は縛られたイスと共にスバルが立ち直させてくれた

涼月「氣を改めて 2年ラスト D組 芹沢 文乃さん」

文乃「べ……別にわ……私は、仕方なくし……してるんだからねー…」
最後の輪のカーテンが降りるとそこは、

少しオレンジっぽいハワイ風の水着を着ていた

男子達「うひょーー最高!!!!」

男子D「可愛いぜ!!」

勇一「ふ……文乃!! ブハアつ、」

涼月「勇一君、鼻血ではなく口から出すのね」

勇一「これは違う! ただの咳だ!」

スバル「全く ややこしいやつだなお前は」

涼月「それじゃ、女子のコスプレに見とれてた菊池君へ」

家康「いやいや、俺は3次元には興味はない、……それはおいと

いて

2年のコスプレ大会が終了して結果に移ります
結果的に勇一の反応見て

A組	1000点
B組	1000点
C組	900点
D組	1000点

となりますね

涼月「このままいけば勇一君は…………あれね」

スバル「そうですね お嬢様」

勇一「誰のせいかな…………」

涼月「では引き続き 3年のコスプレ大会に移行するわよ

涼月奏は勇一を無視してそのまま進行を進めた

涼月「では3年のコスプレ大会始めるわよ

3年A組から

A組	牧島沙織さん
B組	中村ゆりさん
C組	巴マミさん
D組	天川凪子さん

前へどうぞ！」

沙織「いやはやー拙者が勇一氏の色気に参加とは…………困ったで!!」
ゆり「つたぐ、行事じゃなかつたら殺してるわ!!」

ママ!!「あこまつこひひひのはやつたくはないんだけど」

涙子「涼月奏つていう人、なにが目的でこんなことを始めたんだろうか？」

4人はさつきいた人達の場所へ移動した

涼月「では3年の部 最後のコスプレ大会を始めるわよ！」
にゅう勇一、どこまでやり続けるの？

それからまた5分後、輪のカーテンの中で着替える女子4人

涼月「それじゃ、まず3年の1番手 B組 仲村ゆりさん」
ゆり「なんで私がこんなチアガールなのよ！」
勇一「ブハアッ！……あのリーダー的な……ゆりが！セクシー過ぎる！」

（胸囲・腕・腹・太もも）

スバル「お前、鼻血出でるぞ！」

ゆり「あんた！変なことを考えたら殺すわよ…」

勇一「ヒイイツ！」

涼月「結構いいアクションね～次 C組 巴マミさん」

マミ「こうゆうのはやりたくないんだけど……まあ勇一君のために一肌脱いで见せますか！」

輪のカーテンが降りると巴マミの姿はなんだか大人っぽい白いビキニ水着、決めポーズを撮っていた

マミ「どうかしら？勇一君～」

勇一「ブフウ～～～！ 出血が～～～！」

2年テント

まどか「マミさん スタイルがよくて綺麗だな～……」

ほむら「まどかの方が100倍綺麗だわ」

まどか「ほ……ほむらちゃん！？」

さやか「ほむら、それは言い過ぎじゃないのか？」

杏子「そういうけど、さやかも綺麗だと思つぜ」

中央台付近

男子D「ステキー！」

男子E「最高ー！」

涼月「あらあら　さすがは人気者ね～

では次

D組　天川　涙子さん

涙子「なんで勇一に衣装を見せなきゃいけないのか、わからない」
輪の力一テンが降りるとその姿は

とっても可愛いふりのメイド服

涙子「じゃーーん！いらつしゃいませ『ご主人様』」

勇一「ブハアツ！！　あ……姉が……メイド服！」

涼月「勇一君　致命傷ね～」

勇一「お……俺……死ぬ……かも……」

涼月「死ねばいいじゃない」

勇一「何！！！」

にや～勇一　呪われてる

涼月「ではいよいよ　最後になりますね　A組　牧島沙織さん

沙織「ふつふつふーいよいよこの時が来たでござるー！」

最後の輪の力一テンが降りるとその姿は

インデックスの格好したメガネなしの美人の牧島沙織

勇一「さ…沙織！ブハアツ！」

涼月「あらまた倒れた？」

スバル「何やつてんだこのバカは！」

沙織「あら、勇一君 私の衣装に見とれてしまったのかしら～」
勇一（おいおい、メガネを取つたら美人過ぎるこのギャップ！反則
じゃねーか！）

涼月「では実況の菊池君、点数を」

家康「了解！ 勇一は

死亡プラグが立つてるので点数は

A・B・C・Dとも1500点を追加します

よつて今回のコスプレ大会全総合点数は

A組	5840点
B組	6180点
C組	5770点
D組	6270点

となります。ここで午前の競技を終了したいと思います、次は昼休みなので1時間の休憩に入ります

午後からはA・Cでも逆転できる総合リレーがあるので、そこで頑張ってください」

あれから勇一は倒れたままである

勇一「はあ～、悲惨な回は終わつたか・・・・」
？「まだ終わつてないわよ！」

勇一「え？」

俺の後ろに巨大な影・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

勇一「き・・・桐乃！、ゆ・・・ゆり！、お・・・乙姫！

あ・・・あれ・・・なんで3人がここに？」

ゆり「決まつてんじやん！」

桐乃「お仕置きの時間だから」

乙姫「覚悟は出来ているんですね勇一様！」

勇一「お・・・俺、手足動けないんですけど・・・」

ゆり「それはちょうど良かつた」

桐乃「捕まえるのがばぶけたわ

勇一「これって・・・オチ？」

ゆり・桐乃・乙姫「勇一――――――――！」

勇一「やつぱり！」涙

ゆり「死になさい！」

桐乃「死ね――――――！」

乙姫「このド変態！」

勇一「ぎやあ――――――――！」

TO be continue

第4種目・コスプレ大会！？ 後編（後書き）

最後は勇一への死刑ですね

前回と今回の登場作品

まよちき、俺妹、けいおん、まじマギ、バカテス、迷い猫、A B、
とある科学 ですね
感想や意見など どんどんと書いてください
待っています

お休み（前書き）

いつも 2次元です
今回のお時間中の休みの話です

お昼休み

「俺の姉妹達の憂鬱 16話

？「いて……きて……」

誰かが俺を呼んでる……

？「おきて……おきて……」

今後は体を揺さぶれながら俺を呼んでる
呼んでる声に答えない

？「起きて勇一……良かつた、やつと起きてくれた
俺を起してくれたのは4人兄姉の姉である涙ねえだった

勇一「あれ？涙ねえ……それに梓に希…ビツしてここへとゆづか

希「ここは保健室」

梓「お兄ちゃんが気絶したから保健室まで送つたんだよ…」

勇一「そうだつたんだ」ありがと涙ねえ、梓、希……といひで
桐乃は？」

涙子「桐乃ちゃんは友達と一緒にお昼飯食べると困つよ
「アツ」

勇一「お昼飯……つて涙ねえ！？今何時…？」

涙子「え！……今は12時30分だけど？」

ということは俺は約40分くらい寝ていたのか――――――
の時の終わりが11時50分だから……なんてことだ――

涙子「よくわからぬけど私、お昼飯食べに行くから

勇一「え？」

梓「私も軽音部の人達とお昼の約束誘われてるから

勇一「梓も！？」

希「私も巧達と食べに行く」

勇一「希まで～」

涙ねえと梓と希は俺を後にし、保健室から出た
俺は仕方なく保健室を出た

勇一「さて～俺はお昼どしじょつか～」
俺が考えていると左から声が聞こえた

？「勇一様～」

勇一「ん？……あ！乙姫！、どうしてここに？」

乙姫「たまたま通りかかったんで来ちゃいました」

勇一「そうかい、」

乙姫「勇一様、お昼」飯はどうなさいます？」

勇一「そうだな～、久々に2人で昼飯するか」

乙姫「え？え――――！」

とこうわけで俺と乙姫は校舎の屋上で昼飯をすることにした、
よくわからないが乙姫の顔が少し火照ってるみたい

勇一「ん～、空気がおいしい」

乙姫「ここ勇一様のお気に入りの場所ですよね？」

勇一「おう～、よく知ってるな～」

乙姫「だつて勇一様、お昼」飯食べる時いつもここに誘つてくるじ
やないですか」

勇一「あ！わかつちやつた！？」

乙姫「わかりますつて…」笑

こうして俺と乙姫は俺のお気に入りである屋上で昼飯をした。

勇一「乙姫～」のお弁当 うますよ

乙姫「良かつた、勇一様の口にあつて、今朝作つたかいがありまし

た！」

勇一「今朝！乙姫が！」

乙姫「はい！！ 勇一様のために」

「こりや たまげた！俺のために作ってくれるとは俺も愛された男かな～

勇一「まあ姉貴達よりかはまだまだ だけど」

乙姫「勇一様！それはどうゆう意味ですかー？」 怒

勇一「（笑）「めん」「めん」でも俺のために作ってくれるなんて嫁にしたいわ～」

乙姫「え！ それはどうゆうーとー勇一様！？」 興奮

勇一「例えばの話しだってーーー！」

乙姫はいきなり俺の目の前に接近した

乙姫「もう勇一様、どうちかにして欲しいですわ！」

勇一「いやー「めん」「めん」

乙姫「勇一様のバカ……」

勇一「それにしてても乙姫と2人つきりで食べるなんて去年以来だな」
乙姫「そうですね、あの頃は私たち、お互いに気づかずだったんですね～」

勇一「けど2ヶ月ほど経った時、ようやく思い出したんだ、まさか幼なじみの乙姫とは」

乙姫「勇一様、すぐ気づかなかつたなんて酷いですわ」

勇一「あはは……俺もびっくりしたよ2ヶ月で思い出したなんて、

酷いと思つてる 「めんなさい」

乙姫「いいんですわ、それは過去のことですし、そんな勇一様でもわたくしは好きですわ」

勇一「そ……その、ありがと」

なんだかんだ言つてやはり乙姫は俺のことが好きなんだ

10分後

勇一「さて俺の弁当と乙姫の弁当を食つたことだしそれから戻るか」

乙姫「そうですね」

弁当を片づけて屋上から自分達の教室に向つた

その途中、廊下でさやかと杏子が話しながら歩いてた

勇一「おーさやかに杏子ー」

さやか「勇ー」

杏子「勇ー」

勇一「2人してなにしてたんだ?」

さやか「杏子と昼飯食つてた」

勇一「へー そなんだ、しかし杏子はなんでさやかにくつづいて
んだ?」

杏子「いー……いいだろー」

さやか「杏子がどうしてもくつづきたいっていうから」

杏子「さやかー言つなつて、恥ずかしいじゃんか!」

乙姫「ふふふ…(笑) おー一人さんつて仲いいんですね」

杏子「ふふん!まーなー」

なんか妙に偉そう

勇一「まつこいつか、それじゃなーさやか、杏子」

さやか「じゃあね」

杏子「またなー」

話を終えた後、さやかと杏子は俺と乙姫を通り過ぎて行つた

勇一「そをじや、俺達も行きますか」

乙姫「そうですね」

そして俺達も向かう場所へ移動した

お休み（後書き）

まあ のんびりとした回です
次回は最後の競技になります

迷い子と母親（前書き）

ちょっとした時間に投稿しました
天川家の親に関する少しだけの話

迷い子と母親

「俺の姉妹達の憂鬱 17話」

俺達は自分達の教室に来た、そして弁当袋を机の横に引っ掛けた教室を後にした

廊下にて

勇一「さてテントに戻るうか」

乙姫「そうですね…………あれ？」

勇一「どうした？」

乙姫「あれば、迷子でしょうか？」

俺達より7M離れたところに人形を抱えた幼稚園児の子がいた

勇一「行つてみようか？」

乙姫「そうですね」

俺と乙姫は人形を抱えた困った顔をした幼稚園児の子へ近くまで行つた

勇一「どうしたのお嬢ちゃん」

子「お母さんと…………はぐれた…………なので」

乙姫「そう、可哀想 私達がお母さんを探してあげますわ」

子「ほ…………ホント！？」

乙姫「ええ、良いですわよね勇一様、まだ時間はありますよね？」

勇一「まあ 確かにあるけど」

乙姫「わかりました。名前はなんて言ひの？」

子「楓、」

乙姫「楓ちゃんか、可愛い名前ね」

勇一「この人形にも名前あるの？」

楓「うん、この子はお菓子の魔女でアステロッテちゃん、」

勇一「へ、へへ 可愛い…ね」

ちょっと人形が奇妙な気がする

こひして迷子の楓ちゃんの親を探すため楓ちゃんを連れて探しに行つた

昼の競技まであと25分

勇一「校舎付近にはいないな？」

乙姫「では別の場所に行ってみましょつか」

昼の場所まであと20分

乙姫「保護者用のテント付近には探してる親はいませんね」

勇一「そうだね、早く見つかるといいけど」悲

乙姫「勇一様？」

勇一「楓ちゃん、お母さんとばぐれた場所は知ってる？」

楓「うん、多分……あっち……なので……」

楓ちゃんは早歩きではぐれた場所へ移動した

俺と乙姫も付いて行つた

昼の競技まであと17分

楓「いじり……お母さんと……ばぐれた……なので……」

勇一「こ校舎付近か~」

乙姫「やはりいませんね、どこにいるのかしら」とその時、スピーカーから放送部の声が聞こえた

「放送部からのお知らせです 迷子の楓ちゃん、迷子の楓ちゃん、

お母さんは放送部室にいるから近くの人に連れて来て下さることでスピーカーからの声は聞こえなくなつた

勇一「お母さん 見つかったって」

楓「ほ……ホント…？」

乙姫「ええ、今からお母さんのところへ行きましょう。」

俺と乙姫は放送部室に親がいることを知り、

楓ちゃんを連れて行つた

昼の競技まであと13分

放送部室、

母「ありがとうございます。うちの子を見つけてくれて」

勇一「いえいえ、たまたま迷子の楓ちゃんがいたもんですから、母親とはぐれるのは寂しいですし、ほつとけなかつたです」

乙姫「勇一様……」

母親「このたびのお礼はなんとしたらよいか

勇一「別にお礼だなんてそんな……」

母親「お礼としてこれを貰つて下さい

俺は楓ちゃんの母親から袋を渡され、それを受け取つた

母親「本当に楓ちゃんを連れて来てくれてありがとうございます。では」

楓「お姉ちゃん、お兄ちゃん、……ありがとうございます。バイバイイなので・
・・・・・」

俺と乙姫は母親と楓ちゃんに手を振つてお別れをした。

乙姫「良かったですね勇一様」

勇一「そうだね、母親か」

乙姫「勇一様?どうかなさいましたか?」

勇一「え…いや…別に…た…たあ、早く各自のテントに戻らなきゃ遅れるぞ…」

乙姫「勇一様、何か悩んでますわね~」

俺はさつきの楓ちゃんと母親がうらやましかった。俺達天川家には父さんと母さんがいない、生まれた時から親戚が育ってくれた恩人、けど親戚はある病気で俺達中学の時亡くなつた、親戚は亡くなる前、この家を使ってもいいと俺達のために譲つた。それからは俺達が親戚の家を使つてる

親がいる家族つてどうゆう気持ちが俺達にはまだわからない。

いずれにしても俺達の親は本当にいないわけじゃない、何等かの理由があつて戻つてこないのかもしない
だから必ず、父さんと母さんは帰つてくるといつまでも信じてる、
いつでも迎えられるように

待つて

と俺達、涙ねえと桐乃と梓と俺はずつといふことにせつ思つてゐる
昼の競技まであと10分

迷い子と母親（後書き）

実際問題は最後 H P P Y E N D で閉めたいんですけど
もつそろそろ本当の真実が明かされる時が来そうなので
体育祭編が終わればラストスパートです
感想等あれば書いてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0458s/>

俺の姉妹達の憂鬱

2011年11月10日12時01分発行